



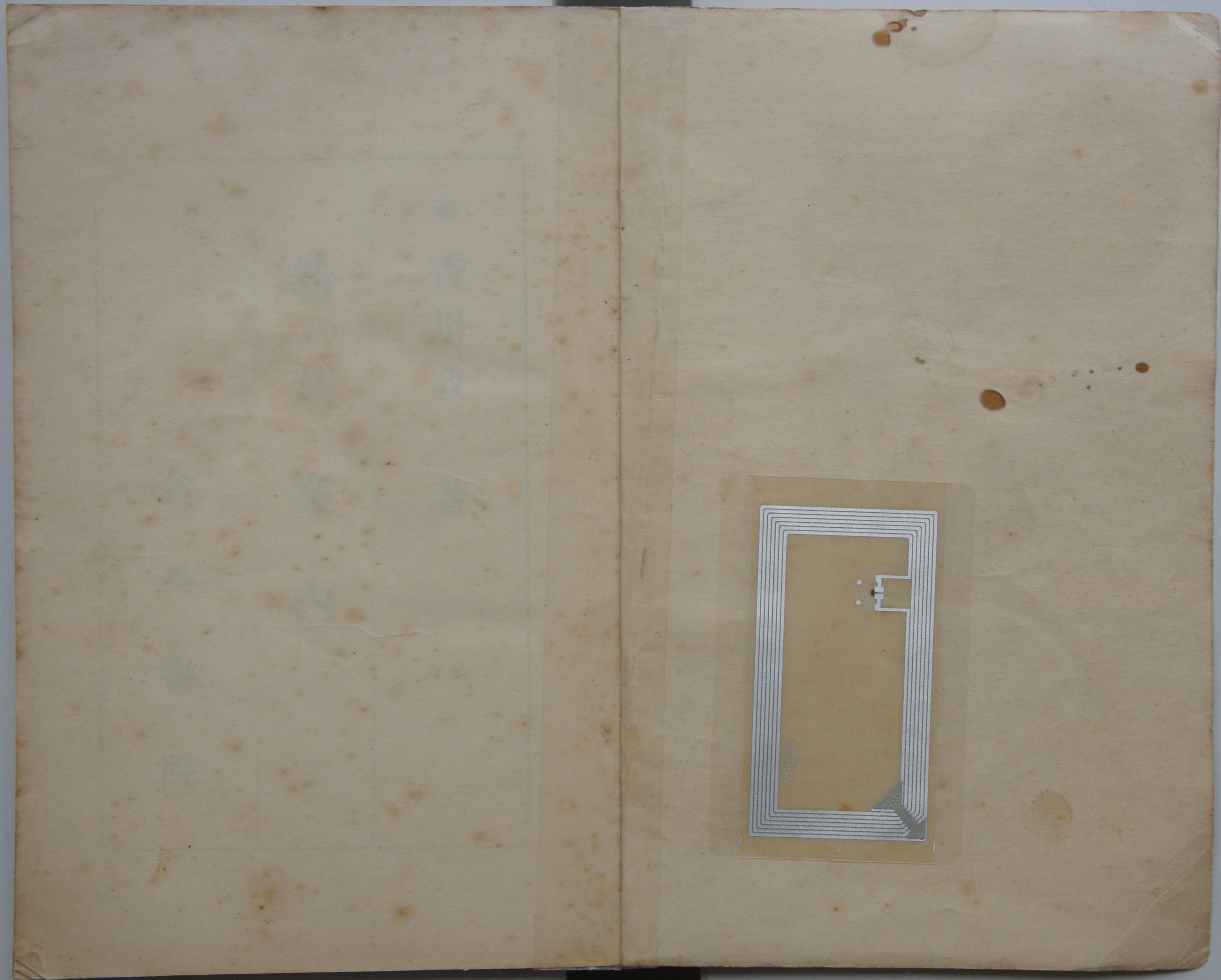
# 新秋案内



新秋案内

Y2  
G





萩香川政一著

新萩案内

含英書院

海峽風潮一巻

海峽風潮一巻

合英書局

### 凡例

- 一、本書は萩に來り見る人に對しての案内を主として之を記述するも、一般の萩人士特に來觀者を案内せらるる人には、是非之を一讀せられんことを希望する。
- 一、世には往々萩の史蹟を誇大に説いて、却つて牽強附會に涉るやうな話を聞かぬでもないが、萩の史蹟は卒直に語つて、十分に大なるものがある。著者は悉く正確なる出所に本づいて之を録し聊かの私意を加ふることなく、以て純眞なる研究者を誤らぬやうに努めた。併し著者の淺學なる。決して事實に多少の間違がないとは言へぬ。切に大方の垂示を仰いで再版の際に訂正したいと思つて居る
- 一、本書は素より専門的の著述でない。されども聊か専門家の參考にもなるやうにさいふことを期して之を書いてある。

昭和十一年新春一月十一日

亡母の忌日の日に胡海閣の椿窓に於て

幸

舍

萩新案内目次

(一) 萩を觀る日程 ..... 一  
(二) 萩を觀る要領 ..... 五  
(三) 萩の滄桑の變 ..... 二  
(四) 萩市の全貌 ..... 六  
(五) 萩の東郊 ..... 二  
(六) 松陰及び關係史蹟 ..... 三  
(七) 萩の南郊 ..... 三  
(八) 堀内史蹟と菊ヶ濱 ..... 三  
(九) 城東區 ..... 三  
(一〇) 本筋通り ..... 七  
(一一) 萩の教育と南區 ..... 九

(一二) 川島土原浮島 ..... 八  
(一三) 北區と小畑越ヶ濱 ..... 三  
(一四) 産業の萩 ..... 一〇  
(一五) 遊覽期と萩土産 ..... 二  
(附) 萩年表 ..... 二

萩新案内目次 (終)

# 新萩案内

萩 香川 政一 著

## (一) 萩を観る日程

山口から長門峽を下つて萩に一泊する。橋本町に阿武川の清流に臨んで富田旅館があつて、行装を解くに便利である。唐樋町まで序に行けば、一二三旅館、常茂恵ホテル、好日館等があつて、防長自動車會社、太陽自動車會社、巴自動車會社等の交通機關中心及び萩三田尻間省營バスの驛もあり、萩市街の要所に當つて居るので遊覧上種々の便宜もある。時刻が早ければ此の日に越ヶ濱の遊覧を済ませて置くに宜し。

翌日松陰史蹟を中心としての松本方面から、明倫史蹟を見て、指月城趾に至り、歸路に海潮寺、亨徳寺等の巨刹から、住吉神社に詣で、野山、岩倉の獄址に志士の幽魂を弔つて、旅館と別れを告げ、金

谷天満宮に奉養して、萩驛から、汽車中の客となり、下り列車、深川湯本驛に下車して、此處に一泊し、深川温泉に浴して旅塵を一洗する。

翌日午前中に仙崎から青海島を遊覧して、美禰線重安驛に下車し、自動車を走らせて、美禰郡秋吉の秋芳洞を觀る。

秋芳洞から自動車で大田に出て、小郡驛より山陽線に乗る。是からは上らうと、下らうと、夜汽車で容易に志す所の次の遊覧地に向ひ得るといふのが、一番賢明なる萩の遊覧順路であらう。

若し夫れ山陰線よりするの客は、東萩驛に下車するに、驛前に二三の旅館があつて、行装を解くに好都合である。少憩の後に、松陰神社に詣で、越ヶ濱遊覽で一應宿に歸つて、小早く夕食を終り、姥倉運河から濱崎船倉、魚市場、住吉神社を経て、女子臺場より、遠く雲烟の間に見島を望み、近くは右に鶴江の夕照、左に指月城山を控えたる菊ヶ濱の日本海の浪音に耳を新しくし、轉じて野山、岩倉の嶽址から、萩市の夜の街を散策して旅館に歸るのである。此の遊覧の便宜は唐樋町に投宿しても略ぼ同様に之を得られる。

翌朝旅館を辭して、明倫史蹟より、指月史蹟を觀て、玉江驛から萩を辭して去るを便にする。若し前

日に玉江驛から下車した人はこの順路を逆にたざればそれも宜しいのである。何れにしても原始林翁鬱たるの指月山を目印しにして萩に來り、此の懐しの山に向つて告別を爲すのが一般來客の常とする所である。

○ 夢の萩街

藤村 壽夫

一、夢の萩街 狹霧に明けりや、

沖のかもめに 潮ときいて、

銅羅はなるく 港は晴れる。

滿洲航路の、滿洲航路の アノ船が出る。

二、花が咲くく 川島堤。

ボート浮べて あの娘二人。

影もおぼろの 夜櫻見れば、

戀のぼんぼり、戀のぼんぼり アノ灯がうるむ。

三、君とひととき 指月の公園を、

そゞろあるけば 若葉がもえる。

偲ぶ御維新 天守の崖は、

一に三つ星、一に三つ星 アノ紋どころ

四、夏はお臺場 あの菊ヶ濱。

空は紺碧 松吹く風に、

ビーチパラソル 濱邊に集や、

波に五色の、波に五色の アノ花が咲く。

五、伸びる港の 姿を見つゝ、

樂しドライブ 笠山登山。

逢ふて嬉しや 明神様の、

池の面おもてに、池の面おもてに アノ躍る魚。

四

自動車にて一たび馳すれば三四時間位で萩の要所を一巡しられないこともないが、それは誠に無趣味である。史都の萩、教育の萩、水郷の萩、詩もあり、歌もあつて、北海の鮮魚を食膳に上せ、産業の新大萩を語る趣味などを一泊もしないで得やうとするのは無理であらう。遊覧順路の都合によりては、市内要所に適當の旅館のあるこ次このの如くであるから、初めて萩を観光の客は是非に一泊の計を立てられるが宜しい。

○萩市内主要旅館

方位		所		旅館名	
中	唐	唐	唐	常 <small>ト</small> 茂 <small>モ</small> 惠 <small>エ</small> ホテル	東
	唐	唐	柳屋	東萩驛前	
	唐	唐	一二三	雁島	
	唐	唐	好日	田原旅館	
新	唐	唐	花屋	田中屋旅館	西
	唐	唐	新堀	松原旅館	
方位		所		旅館名	
東	東	東	東	東萩驛前	東
	東	東	東	東萩驛前	
西	西	西	西	東萩驛前	西
	西	西	西	東萩驛前	

方位		所		旅館名	
中	唐	唐	唐	常 <small>ト</small> 茂 <small>モ</small> 惠 <small>エ</small> ホテル	東
	唐	唐	柳屋	東萩驛前	
	唐	唐	一二三	雁島	
	唐	唐	好日	田原旅館	
新	唐	唐	花屋	田中屋旅館	西
	唐	唐	新堀	松原旅館	
方位		所		旅館名	
東	東	東	東	東萩驛前	東
	東	東	東	東萩驛前	
西	西	西	西	東萩驛前	西
	西	西	西	東萩驛前	

(二) 萩を觀る要領

史都の萩を觀るには聊か年代の推移を心得て置く必要がある。萩の沖に相島といふ島がある。昔、日本の神様朝鮮の神様が出逢はれた所といふ傳説のあるのは、早くから此の地方に日韓の接觸があつたことを想像しられ得るが、文献に徴すべき萩の歴史は奈良時代頃から始まるのである。

奈良佛教の代表者たる行基菩薩が來て佛像の作を遺したといふ所が萩の南郊、日輪山南明寺、潮音山

五



観音院等である。奈良の東大寺の大佛殿建立に縁故のあつたといふのが、同じく南郊の白牛山龍藏寺と國守長者等であるから、其の頃の萩は霧口の螢火山の麓から玉江の面影山、権現山の麓までの山腰を遶つて居る一帯の地が萩の中心であつたことが思はれる。

萩の沖の相島に中村家があつて、其の祖先が壽永年間に奥州中村から落ちて来て、初めて此の島を開拓して居ることは中村家に立派な文献がある。萩の奥の川上村に壽永役後に平家の落人の隠匿したと言はれる所がある。萩の玉江の白水仙は平家の城址であらうと言はれ、玉江の女が京都の大原女のやうに頭に物を載せて賣つて歩くのも由緒ありけであるが、割合に文献には乏しい。

鎌倉時代の始めに佐々木高綱の勸請で椿八幡宮を、金谷天神が出来て、行基の佛敎史蹟を相對して居るが、市街の發達とまでには至らなかつたやうである。鎌倉時代の中頃即ち蒙古襲來の前後に北條前司直元が来て初めて指月に城を築いたといふことがある。多分長府の長門探題の分營で、北邊の警備に任じたものであらう。斯くて直元の居館は、今の堀内の指月橋を渡つた所にあつたといふから、爲に其の附近に小規模の城下町が出来たと思はねばならぬ。

鎌倉時代の終の頃に松本の町が發達したやうである。其處の町は花園上皇の御留錫があつたのに因み、花園市といふの傳説がある。

戰國時代に石州津和野三本木城主吉見正頼が封を子廣頼に譲つて後、來つて指月に隱居所を建てたのが今の指月橋の手前の天樹院のある所である。而して其の附近に又た或程度まで城下町が發達して居つたことは古記録に見えて居る。此の時代に中の倉の人丸神社が出来た。

慶長五年十月十日毛利輝元公(天樹公)が防長二州を受領するに及び、吉見氏は指月を公に譲つて。阿武郡大井に退いた。慶長九年十一月十一日輝元公が指月城に入つてから、秀就(大照公)、綱廣(泰巖公)、吉就(壽徳公)、吉廣(青雲公)、吉元(泰桓公)、宗廣(觀光公)、重就(英雲公)、治親(容徳公)、齊房(靖恭公)、齊熙(清徳公)、齊元(邦憲公)、齊廣(崇文公)、相傳へて敬親公(忠正公)に至り、安政五年八月二十一日孝明天皇の密勅を指月城に奉戴して、起つて王事に勤め、藩内より又た多くの名士を出して共に明治維新の回天の鴻業を翼賛するに至つた。

萩が城下町として主として發達したるは毛利氏時代に在ること云ふまでもない。而して毛利氏の歴史は勤王を以て第一となすので、萩の史蹟が専ら勤王のことに關係し、維新の發祥地さまでに言はれて居るが、三百年間の民政、教育、産業につきて萩は猶ほ見るべき多くを持つて居る。

○巴城江山の賦（上）

塚本小治郎

秋蘭けて、我れ來り觀る巴城の地。

山舊によりて秀で立ち、水舊によりて漫々と、

繞る碧瑠璃八つの景、秀麗なりや萩の江山。

古往今來幾千年、

晝夜を捨てず阿武の川水。作り作れる大三角洲。

雛鳳翼まさに伸び、飛ばんこするに似たるかな。

防長の靈氣鍾り、幾百の

俊傑生まれしところ。育ちし所。

大なるかなや、三角洲。

大江の流、未清ければ、

澤潟の花ここに榮えて、明君賢臣世々に續ぎ、

彼の郡山城頭の祖訓を守る百萬一心。

忠誠の業撓みなき三百年。遂に維新の大業を、

輔け來りし雄藩の、指月の城の趾ぞこれ。

今殘濠の水老いて、敗荷の影は亂るれど、

西天萬里、倫敦の

橋下に通ず、萩の川水。

世の大勢の洞察は

有事の秋に備ふべく、

鎖國に人は眠れる日、

文化を入るるに早かりし、

この西陲の一角地。

毛利氏は神代天穗日命の裔で、平安時代に平城天皇の皇子一品阿保親王の流れを受けて居ることから一品を便化して一字三星章を家紋とし、戦國時代から、別に澤潟章をも副用して居る。本姓大江を鎌

倉時代に毛利季光公の時から毛利氏と稱し、戰國時代に毛利元就公(洞春公)あり。藝州高田郡吉田の郡山城に在つて、山陰山陽の十三州を領した時が、毛利氏の全盛時代であつてこれを長州藩の祖と仰ぐのである。

元就公嘗て勅を奉じて、弘治元年十月朔日に大内義隆のために陶賊を嚴島に討ち、正親町天皇に御即位資を奉つて、菊桐の御紋章を拜戴し、子隆元公(常榮公)は大膳大夫に任ぜられて、子孫の世襲職となつた。

輝元公關ヶ原の役に一敗して、百十二萬石の大封から俄に防長二州の三十六萬石を有するのみとなつたが、第五代綱廣公は萬治制法を定めて藩政の基を固め、第八代吉元公は明倫館を創建して教學の本を示し第十代重就公は經濟の根本を確立して後日の飛躍に備へた。第十六代敬親公の天保時代に俊傑村田清風を擧用して、藩治の大改革を行ひ、文武を肅張したことがある。巴水流通す倫敦の天。言ふことを休めよ外警久しく肅然たりと、言つて大に海防の策を講じて置いた清風の先見の明が的中して、嘉永六年米艦渡來後の國家多難の際に處して、毛利氏は確かに他の侯伯より一步先んじて機會を捉える事が出來たのである。

### (三) 萩の滄桑の變

史都の萩のみを見て地理、地文上の學術都市としての萩を見落す人が多いのを遺憾として、序に萩の滄桑の變を述べて置きたい。山口縣下第二の長流たる阿武川が鏡道山口線の沿線地から發源して、昔は石州の津和野谿谷に落ちて居つたのを、津和野の青野山の噴火や、徳佐の御坂火山群の噴出等で水の落口が塞つた。

長い湖水のやうに湛えられた水は、今の山口線長門峽驛のある所から南方に落ち場を索めて、流れ始めたのが阿武川の第二の川筋で、川上村を経て、萩に至つて日本海に朝する。これ即ち今日の阿武川である。

阿武川の源が地文上極めて珍しい丁字川に始まるのも誠に面白い。石英粗面岩が縦に割れて、水を深く落して浸蝕させたので、長門峽に奇巖怪石、巨潭深淵が幾つも出來て居り、相應に落差のある所から、水勢によりて出來た岩固屋も少くない。磐石の上で落下の岩塊が水に揺れて、長年中に拵えた白などは計へきれぬ程澤山あつて、地文學上見逃すべからざるものであらう。地相から言つて長門峽筋

は今や浸蝕の壯年期であるから、幾十億年の壽命を有する地球から見ると、この滄桑の變は餘り古いものではない。

阿武川の齧した土砂が河口に沈澱するに當つて、北海の波浪が、白砂を逆に運び來り、川筋に直角にサンドヒルを作るの形勢となる。斯くて阿武河口の三角洲は割合に早く發達したと見るこゝが出来る。この三角洲が即ち今日の萩市街の主要區域であつて、俗に吹上げと稱せらるる地方が特に高いのは流下の土砂も、吹き寄せの海砂もが北風と南風との力を借りて兩方からこの地點に高く土砂を盛り上げるに至つたものである。

吉見時代の指月山は殆ど海中の一孤島で、玉江口は僅かに連り干潮の時には菊ヶ濱口も、かつく歩して渡られた位だつたといふことである。併し満潮の時には、今の疏水の所から海潮が入り來つて、漫々玉江浦に寄せ來り、吉見の城下町から指月山へは主に渡し舟で往來して居つたものである。

毛利氏築城の時に大に埋立をして橋本川を遠く南に退けて堀内を廣くし、海波は今の菊ヶ濱を境に入り來り得ぬやうにして、潮の去來を築き留めたのが、東園下の潮留御門である。然るに後世之を潮入御門といふのは、この門の脇から海水を城濠に引いて居つたからの事である。潮留御門の跡は今狭い

麥畠になつて磯際に残つて居る。今の疏水は大正十四年に再び、昔の潮の去來の筋を辿つて堀り開けたものである。

阿武川の左岸に並んで高佐村の伏馬山、吉部村の千石臺、福川村の羽賀臺等の死火山や熔岩臺地が連接して萩附近に至つて磯際に萩市の鶴江臺、中の臺、狐島、名越臺、大井村の鶴山臺等の熔岩臺地を生じ、阿胡海上には六個の熔岩臺地の小島嶼を成して居るのが六島村で、主島を大島といひ、相島に次ぐ。萩沖の海上に碁布するもの即ち是である。

羽賀臺は天保十四年四月一日藩主忠正公が村田清風の献策を用ひ、大閱兵を此處に行ひて、大に文恬武嬉の風を改められたことでも有名である。名越臺一名名越半島には笠山と稱する小死火山があつて、完全なる實物の火山標本として、登臨に便なること恐くは全國中に其の類を見ぬであらう。登臨すれば小噴火口があつてお鉢廻りも出来る。山麓に明神池、風穴があつて地文上の研究資料たるこゝは後に詳述する。

名越半島と中の臺との間に潟灣がある。萩の新築港は此處に行はれるのである。

萩市街を抱くの兩河口即ち橋本川口と松本川口とは地文學上砂嘴の發達するを防ぎ兼ねて、橋本川口

の西濱砂嘴の如きは玉江橋の上から能く之を望むことが出来るやうに長い。兩砂嘴が河口を狭めるので往々萩に洪水の恐れあるのを救ふために、忠正公の開渠し給ふたのが姥倉の堀割運河で、萩港の税關は此處にある。

元來萩市の嘗て從屬して居つた阿武郡は、昔の阿武國であつて當時は隣郡の大津郡か之に屬して居つた。大津は即ち阿武津である。

阿武國の國造は萩市の北隣大井村に居つたので、大井には今も古墳が所々に發見しられて居る。大井は即ち阿武居である。

阿武は海士あまこにて海兵の居る所である。海士兒あまこの活動の海面が海士兒の海、即ち阿胡の海で、奈古村の沖から萩の沖の海面がそれであらう。奈古浦は即ち阿胡浦である。斯くて奈古、大井は皆や共に東萩驛に隣接する山陰線上の一驛となつて居る。

○巴城江山の賦（下）

塚本小治郎

文武の道をすすめたる、明倫館の址を訪へ。

碩學、鴻儒相踵ぎて、努力極めし教養に、  
人材雲の湧くがごこ、輩出したる當年の、  
其の壯觀やいかなりし。今猶残る聖賢堂。

松下村塾來り訪ひ、悲歌慷慨の青年の

血潮高鳴り、太刀こりて柱に残す痕も見き。

狭き塾舎に二年の教化、實にや廊廟棟梁の器、

輩出したる偉大の感化。奇蹟といはゞ君に任せん。

馬鞍山下東光寺の奥、長添山に、小畑の浦に、

大谷のあたり、椿郷、道こそかはれ、忠孝の

人の奥津城、夢の國。

幻影のあまたづね追へば、歴史を語る江山は、

今落日の紅浴びて、燃ゆるばかりのながめかな。

彩雲くれて、闇、海より上る、

餘光あり。天の一方、もしこの三角洲なかりせば、

近古の歴史今ある如くに、世界の歴史今ある如くに、

絢爛の美はなかりしならむ。

ほのかに白き菊ヶ濱邊に、おもひ耽りて獨り立てば、

碧潮の香は人を吹き、清肅の氣は髪に入り來る。

#### (四) 萩市の全貌

舊藩時代の萩は當島濱崎宰判といふ行政區域の中に管轄しられて、今の萩市の區域以外に三見、明木、佐々並、川上、福川、紫福、大井、六島の八箇村區域を包含して居つた。蓋しこの八箇村は全く萩市の後地をなすもので、孤立の萩市だけでは到底何事も爲すことが出來ない。萩市の發展すると否かは、この後地との關係如何にあるといふので、之を一轄して一政治區としたといふことは、流石に豪い遣り方であつた。されば今後とても、本當に萩市が大萩として發展し得ることは、この八箇村を精神的に又た物質的に本當に結合して、全く同躰となつた後でなくては決して出來ないものと信ずる。

大正十四年四月三日は天樹公の萩開府三百年祭と共に山陰鐵道が開通して萩に到つた日である。之を機會として、川内即ち三角洲上の萩町と川外の椿東村、椿村、山田村との一町三箇村が合同して、大萩町を作り、昭和二年十二月九日には萩港が開港場となり、昭和八年七月一日から市制を布いて、防長二州の北海岸の首腦地たる準備が出來上つた。

今の萩市は東經百三十一度二十三分、北緯二十四度二十六分に當つて、我國の東部標準時と地方時と零時十二分三十二秒の差を持つて居る。江向の地に萩市役所を置いて、東西二里二十七町、南北四里十六町の地域を約六千七百戸の戸數を約三萬五千の人口を統轄して居る。其の廣袤區別は次の如くである。

舊萩町	〇・五六 方里	椿東村	一・〇〇 方里
椿村	〇・九五 方里	山田村	〇・九八 方里
計	四・九三 方里		

萩を巴城と呼ぶのは萬葉假名の巴城から出たもので、何も萩が巴の形をして居るのではない。併し松本、橋本の兩川筋に抱かれて居る川内の萩の地形は、如何にも雛鳥將に飛ばんとするやうな形で面白



○萩市憲

- 一、郷土ノ歴史ニ鑑ミ尊王ノ精神ヲ發揚スベシ
- 二、百萬一心ノ祖訓ヲ躰シ市勢ノ更張ニ當ルベシ
- 三、先賢ノ遺志ヲ繼ギ進テ有用ノ材幹タルヲ期スベシ

○萩市歌

- 一、青史輝く志都岐山、地靈人傑相倚りて、  
尊王の意氣天を衝く、郷土大萩譽あれ。
- 二、祖訓治し阿胡の海、百萬一心ゆるみなく、  
進展の潮地に涵る、郷土大萩榮えあれ。
- 三、遺風尊し松下塾、一路向上ひたふるに、  
先賢の跡人は踐む、郷土大萩望みあれ。

(五) 萩の東郊

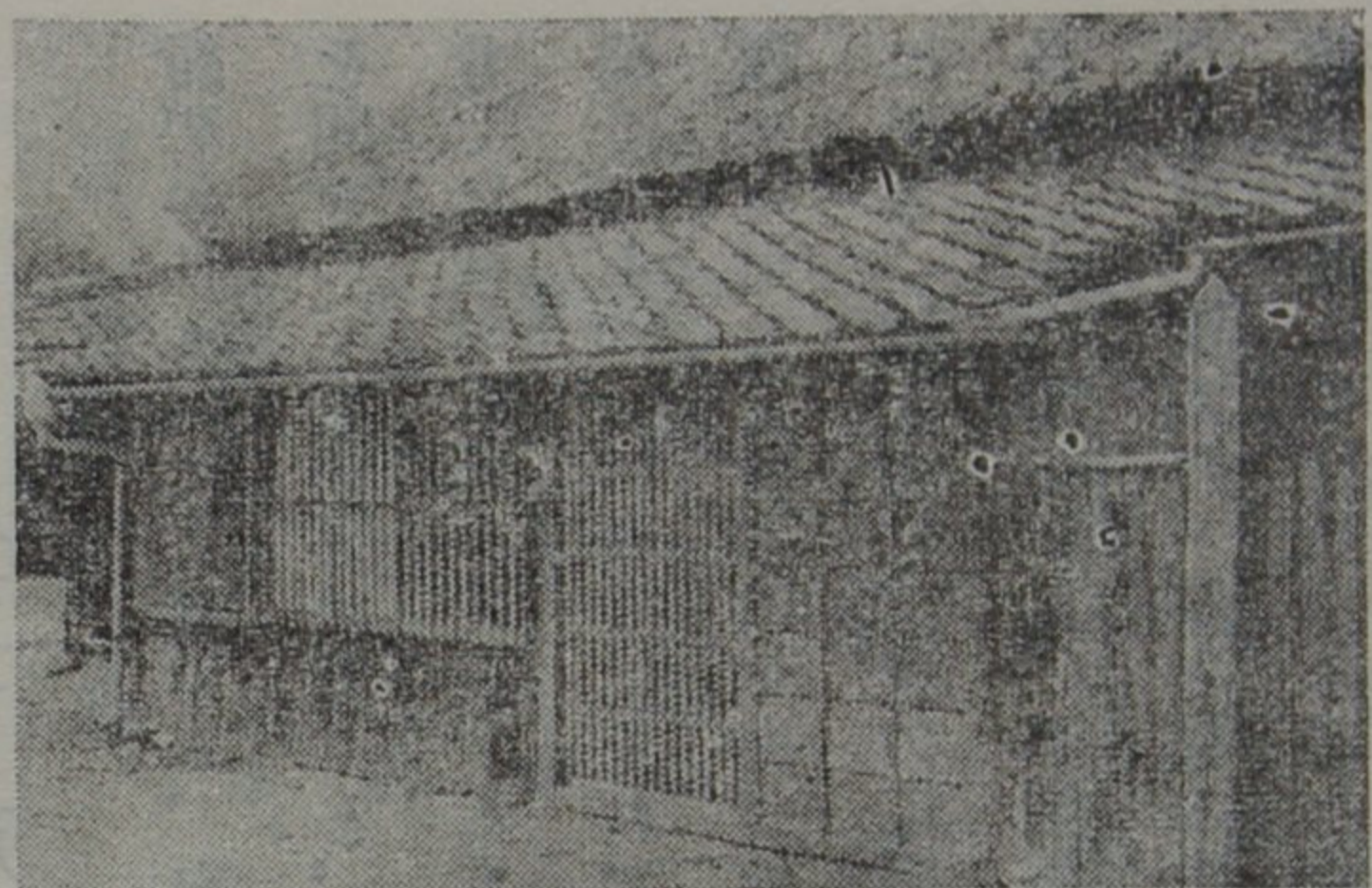
紺碧の日本海に去來する、白帆の波間に點々たるを眺め、砂白く岩珍らしき長汀に、漣波のささやぎを聞きつゝ東萩驛に着くと、其處は早や萩の東郊である。昔では萩の東郊を代表するものは黄檗派の巨刹護國山東光寺と、名物萩焼(又た松本焼)の三輪焼ミ坂焼ミであつた。今ではそれに松陰史蹟が加はつて居る。驛から出ると松本川が先づ水郷の萩を語るのである。川の右岸に沿うて行くこゝ程もなく松本橋の袂に出る。橋を渡れば萩の市街の方へ出るが、それは暫く後刻に廻して、橋は先づ鯉鱗橋と呼んで居る。長さ三十六間といふのが鯉魚の三十六鱗に因みを持つからである。橋の少し上手に數株の常緑枝を交ゆる所、質素の一屋を見るのが産業組合の恩人、品川彌二郎子爵誕生の舊宅である。橋上の眺めは源平の合戦と新茶の芳りで名高い山城宇治の宇治橋上の眺めにその儘そっくりである。彼處には上流に鹿飛ししこみ、米浸こめかじの急湍白泡を湧かす所が見えるが、此處にはそれが無いのを遺憾とする。併し洋々たる阿武の流れが、上津江の方から舟筏を運んで流れ下るの景色は彼處に見るべからずして、



此處に初めて之を見る。

前面の高からず又た低くからぬ山の嶺の起伏する間に東光寺伽藍の棟瓦の隠現するのは、全然宇治橋から黄檗の本山萬福寺を眺める景趣と一致して居る所に低回顧望して詩趣を湧かしむるこゝ少くない。

伊藤公藤の舊宅



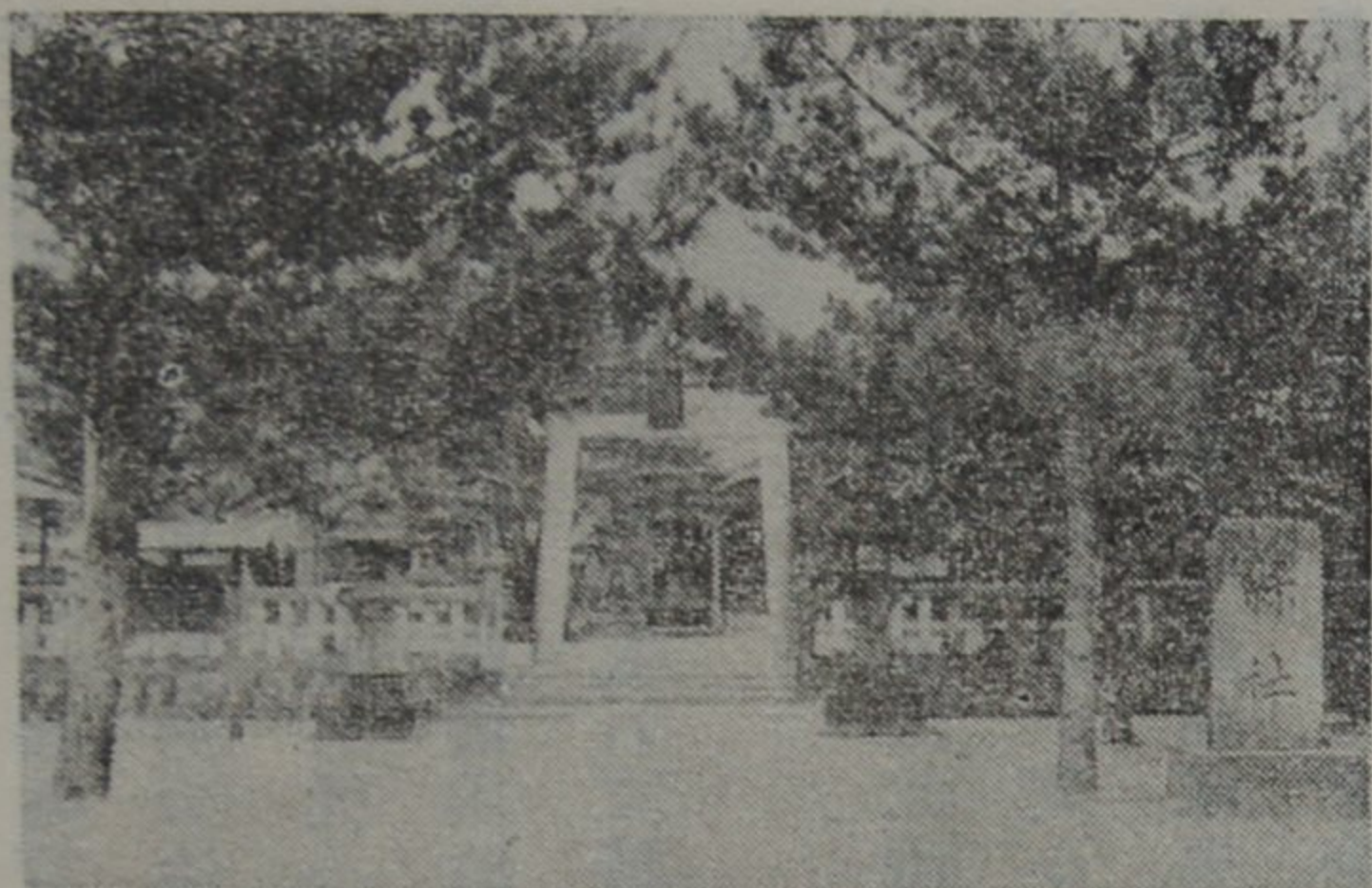
深い玉木文之進の舊宅なきが今も昔のままで皆この道筋に存在して居る。これ恰も諸葛孔明の隆中の

一たび東送せらるるの身となつて、神國の幹を多く松邑から出づの機會を作り、以て明治維新回天の大業を此處に現出するに至つた。次に松陰誕生地を訪ふのが順路である。

松陰神社

松陰誕生地には往時樹々亭といふ小屋があつて、天保元年八月四日に松陰は、この小屋に生れたのである。其處から歩を左に移すこ護國墓地がある。玉木文之進、久阪玄瑞、松陰の父杉百合之助母瀧子、兄杉民治、弟杉敏三郎の墓が先づ並んで居り、小徑を隔て、松陰二十一回猛士の墓、松陰の養父、吉田大助、門人高杉晋作、馬島甫仙等の墓が師弟相並んで何物かを語るやうである。

東光寺の舊時の規模は猶ほ宏大であつたが、今は末寺などは皆な廢寺となつて、敷地は田畑に變じた。それにしても猶優に往時の盛大を追懷するに足るべきものがある、開山は黄檗隱元の弟子慧極和尚で、壽徳院毛利吉就公の開創する所である。境内には藩公五代(吉

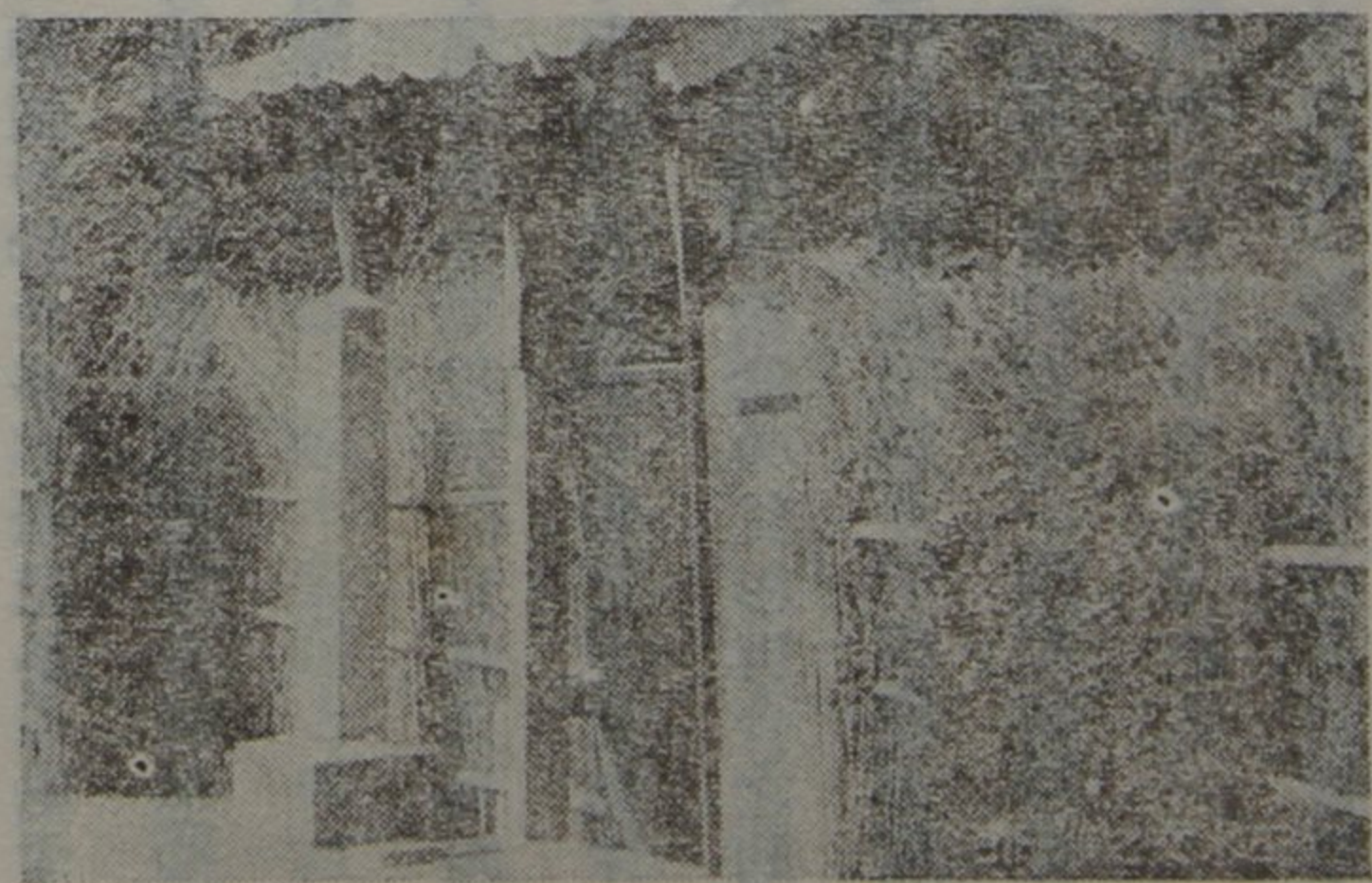


就、吉元、重就、齊房、齊元の廟墓と元治甲子殉難士の招魂場とがある。藩公廟所の正面が吉就公で、公の夫人長壽夫人の墓がこれに並んで居るが、夫人の美談は小學校の國定修身書にも載せられて居る。向ひて最右側が英雲院重就公の御墓で歴代藩主中、産業經濟の治蹟に於ては先づ指を公に屈する。

向ひて最左側が泰桓院吉元公御夫婦の御墓で、明倫館創建の主である。夫人法林院は備前侯池田新太郎少將光政の女で嫁入道具に書物を大長持に一抔入れて持つて來られたといふ逸話のある賢夫人である。

甲子殉難士の招魂場とは元治元年の京師禁門の變に長州軍が敗北して、朝敵といふ汚名を蒙るに至つた犠牲となつて俗論派のために殺された正義の士の招魂場である。

長州の勤王運動と活動を全く松陰門下の爲したもののやうに言ふ人があるが聊か違つて居る。其の前に是等殉難の士が率先して活躍したものであるが、不幸にして



玉木文進之舊宅

事成らずして刑場の露も消えた。而して其の後を引き受けて俗論黨を撃退して、進んで幕府征長の軍を破り、能く藩公の素志を達成したのが高杉晋作以下多く松門の士である。

招魂場の側に楯取道明の墓と碑がある、道明は松陰の妹壽子の生んだもので明治二十九年の一月一日に臺灣で土匪のために殺された、殉難教育者である。臺灣教育の今日あるは實に道明等の創建の賜物である。

話が前へ戻るやうなが、松陰誕生地は萩城下から遠く大津郡の絶勝青海島の方までも見渡して實に眺望に富んだ所である。宇治の黄檗へ參詣するに

松陰米搗臺



山門を出れば日本ぞ茶摘み歌

といふ用上菊舎の句碑があるが、東光寺にはそれが無い。

併し菊舎が樹々亭に來て詠んだ句に

閑けさを樹々に聽かれよ秋の雨

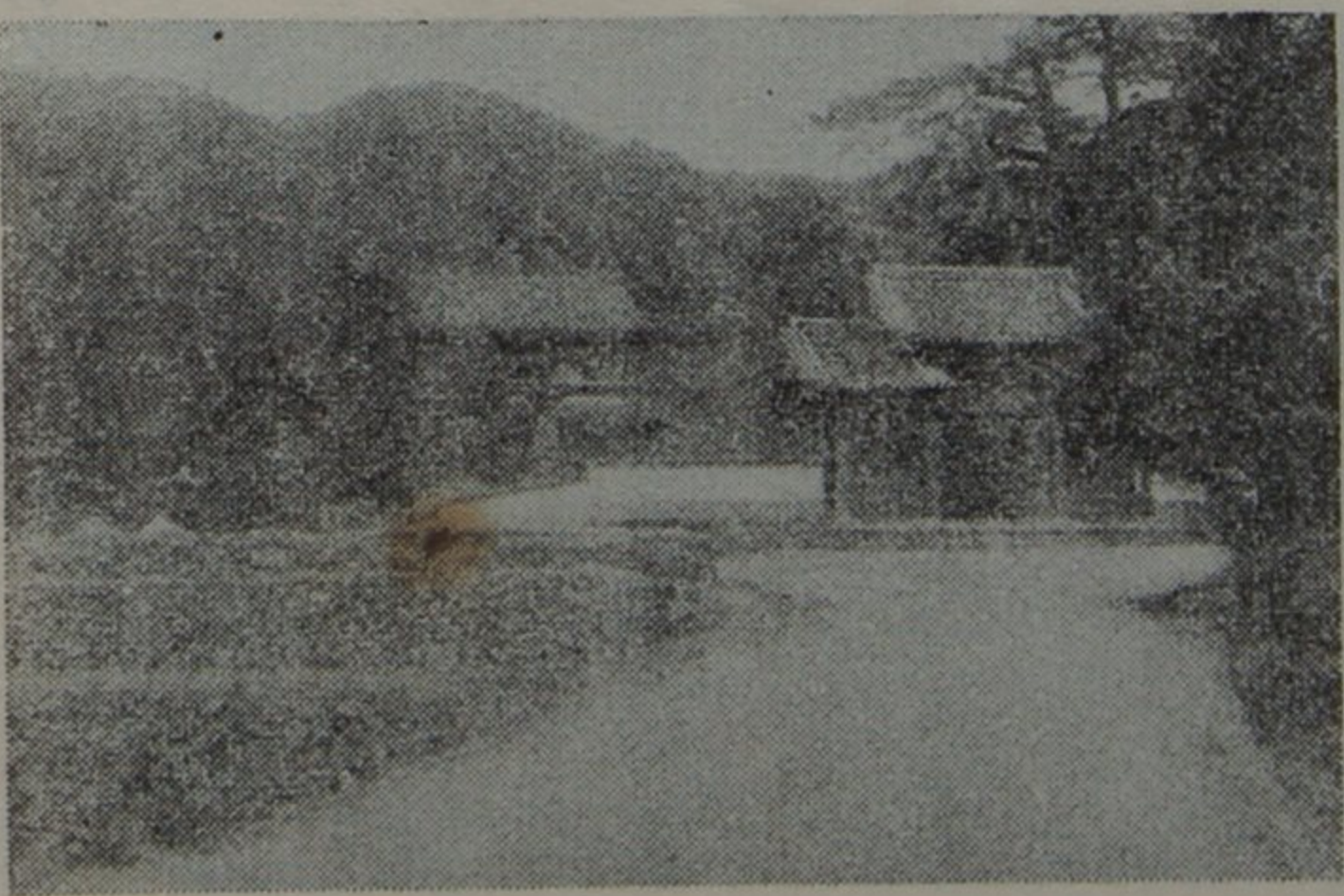
こいふのがあつて樹々亭の名は蓋しこれから起つたものである。又た菊舎に樹々亭の記があつて、よく附近の景致を言ひ盡くして居る。菊舎は縣下長府の女流俳人で、彼の加賀の千代女に相並んで才名を天下に馳せたものである。

○樹々亭の記 (抄出)

田上菊舎

朝には唐人山の頂に臨み、月は指月の西山に傾く、霸城の市は手に取る如くにて、端の坊の二六に日夜の長短をわかち、菊ヶ濱千尋の海遙に見晴し、天色に四季の寒暖を知る。諏訪明神の祭り太鼓は秋の勢に遵ひ、唐派禪院の鐘、寒雲を隔つ。田床つつみの鴨の聲幽かにして下津江の鶴鳴耳を貫く、金鑄原に鐘も見つけねば、幽靈坂に化物もなし。唯だ梅櫻春を知らせ松柏涼風を催す。

東光寺全景

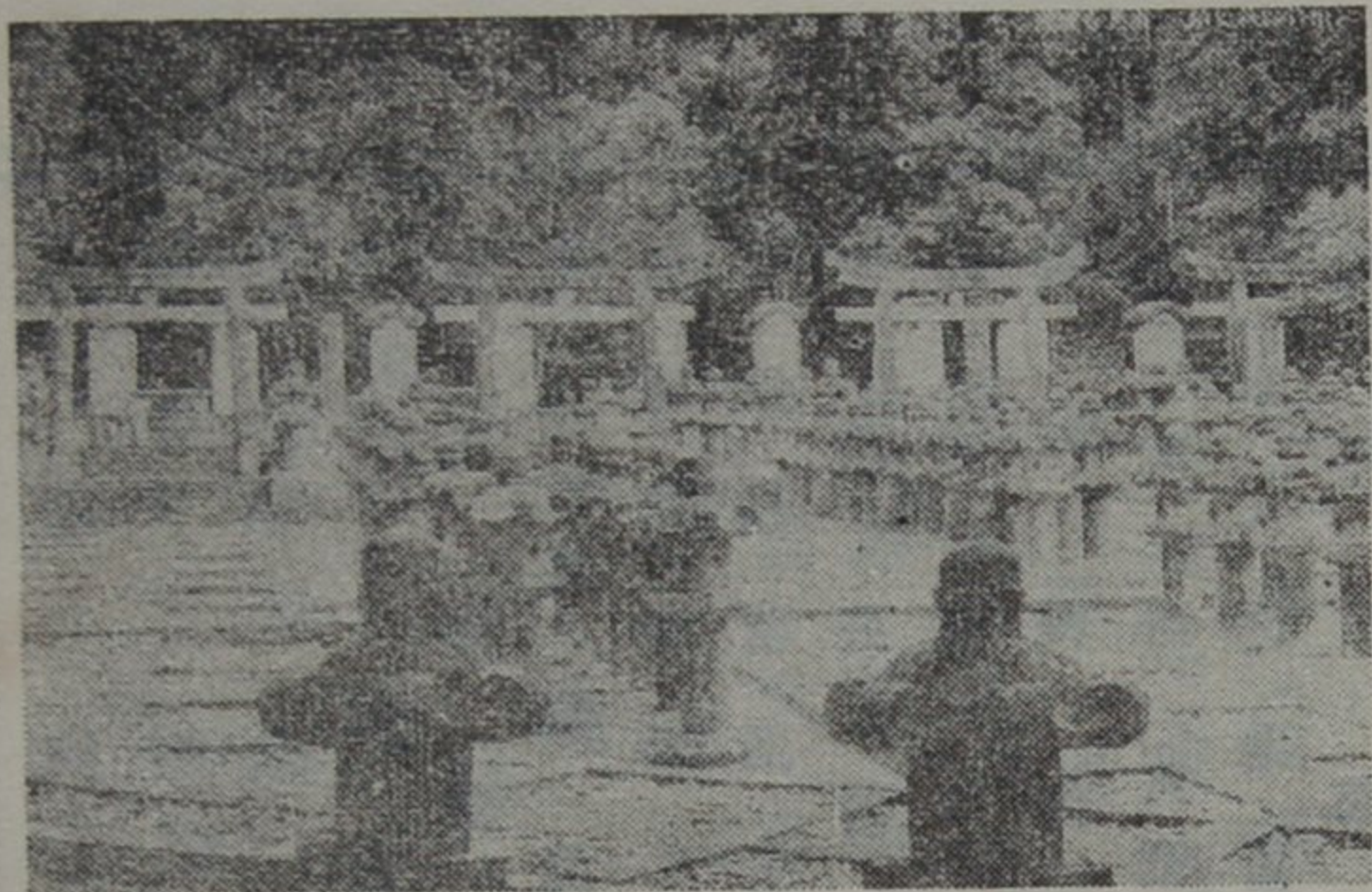


唐派禪院は東光寺のこみである。今の東萩驛のある所が下津江である。伊藤公の舊宅のある所が金鑄原である。田床山は松陰誕生地の後方にあつて松陰の幼時に草を

刈つた野山である。諏訪明神は當時松本の上市にあつたが、今は廢社となつて中ノ倉の人丸社に合併

になつて居る。中ノ倉は即ち唐人山の麓で、松本燒の坂窯が又た其處にある。

今一つの三輪燒の窯は松陰神社の前の道を北に辿つて小畑へ赴く道の右手の山の麓にある。萩の陶器は松本の外に小畑でも數戸焼いて居る足利時代の松本燒といふのは小畑の方であつたらう言はれて居る。松本の方は皆毛利氏の入國後のものである。萩の陶器の年産額は總計貳萬圓餘と言はれる。



東光寺境内

○萩の東郊案内表

名	稱	所	在	記	事
松陰神社	松陰神社境内	松本	縣社	吉田松陰子弟教養の舊塾	
松陰村	松陰村	松本	松陰の生家	内務大臣	
品川子爵舊宅	品川子爵邸にあり	津	舊藩主英雲公の茶邸	贈從四位	
花月樓	花月樓	津	贈從四位		
來原良藏舊宅	來原良藏舊宅	津	贈正五位		
松浦松洞誕生地	松浦松洞誕生地	前	贈從四位		
吉田稻鷹誕生地	吉田稻鷹誕生地	前	贈從四位		
伊藤公舊宅	伊藤公舊宅	前	舊宅及び銅像あり		
杉家現宅	杉家現宅	前	久保五郎右衛門時代松下村塾の跡		
穴戸磯舊宅	穴戸磯舊宅	前	子爵		
通心寺(黃檗宗)	通心寺(黃檗宗)	野	松浦松洞の墓あり又寺より男爵松本鼎を出せり		
玉木文之進舊邸	玉木文之進舊邸	野	松陰及び乃木大將の師		
高杉晋作假居跡	高杉晋作假居跡	巖	舊名樹々亭		
			坂下にあり		

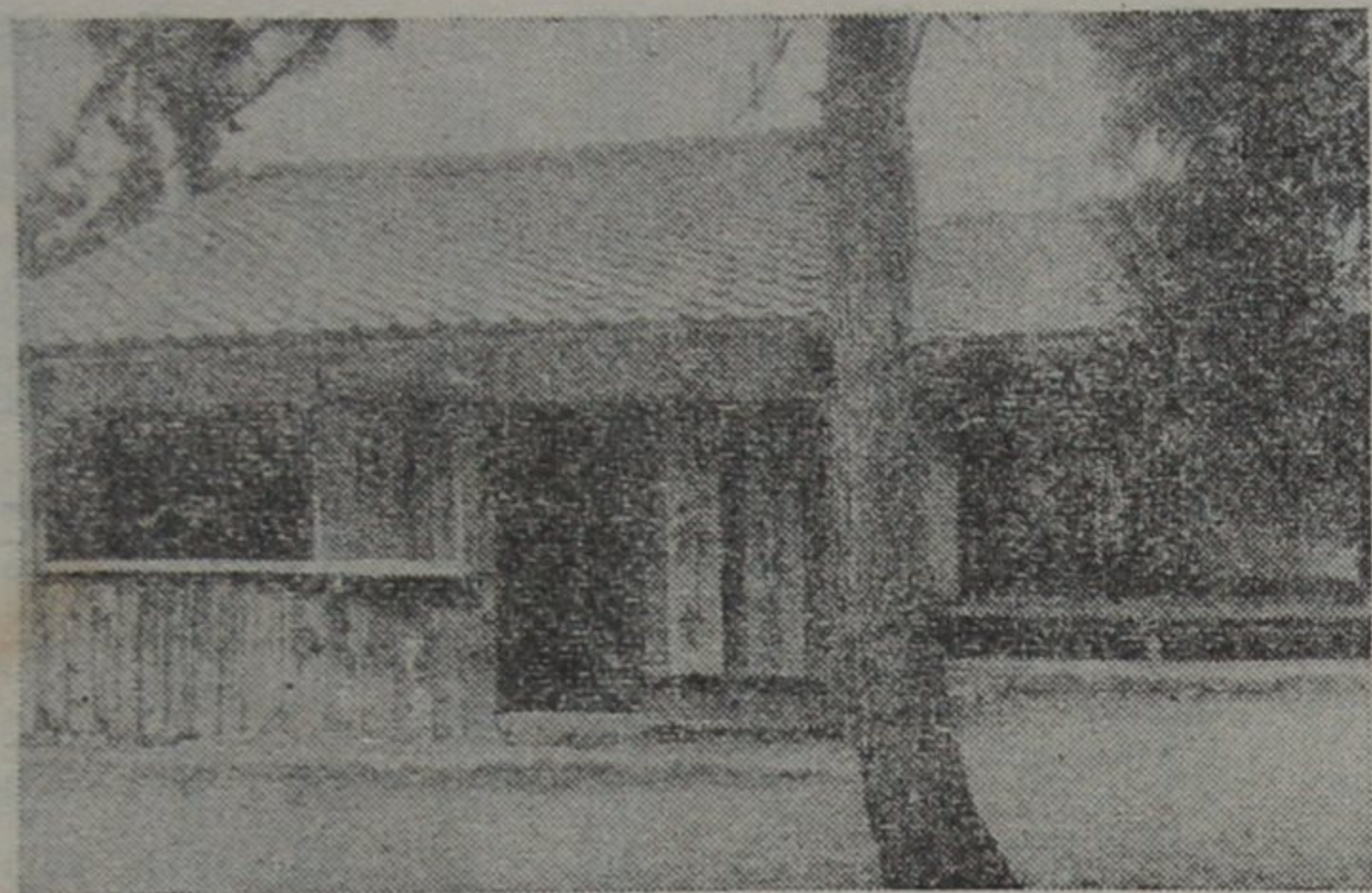
護國墓地	東光寺墓域	東光寺境内	護國山麓	藩公廟所	玉木、久阪、杉、吉田一家の墓及び高杉晋作、口羽、山、馬島甫仙(以上名士)、和智東郊(名儒)の墓あり
東光寺(黃檗宗)	東光寺	東光寺境内	護國山麓	正義派殉難者	
甲子殉難士招魂場	甲子殉難士招魂場	東光寺境内	臺灣教育功勞殉難者	司法大臣	
山田伯誕生地	山田伯誕生地	倉	贈正四位	男爵にて松陰の妹婿	
松島剛藏舊宅	松島剛藏舊宅	倉	清溪の勝あり	坂高麗左衛門の家	
楫坂素彦舊宅	楫坂素彦舊宅	倉	三輪休雪の裔	賀田組記念	
丸神社	丸神社	倉	品川子爵家の墓あり	花園天皇の御遺跡傳説あり	
坂丸燒竈元	坂丸燒竈元	麓	花園天皇の御遺跡傳説あり	藩の大筒役にて鑄砲及び鑄鐘業績多く邸内に工場ありしが今は之を廢す	
三輪燒竈元	三輪燒竈元	麓	松陰が親類預に處せられし時暫く居りし縁		
賀田金三郎銅像	賀田金三郎銅像	野			
明安寺(眞宗)	明安寺(眞宗)	市			
廣嚴寺(黃檗宗)	廣嚴寺(黃檗宗)	市			
郡司家	郡司家	原			
高洲家	高洲家	口			

## (六) 松陰及び關係史蹟

吉田松陰の生家杉家、養家の吉田家は共にも萩の川内の川島に家があつて、生父杉百合之助と養父吉田大助とは兄弟である。文化十年三月に川島に大火があつて、杉家も吉田家も類焼の厄に逢ひ、共に假寓を構えて轉々すること久しきに及んだ。文政八年に杉家が松本の護國山南の團子巖といふ所の彼の樹々亭に住むこととなるや、百合之助は家主村田右中の第三女瀧子を娶つて妻となしたのが翌九年であり、其の縁にて樹々亭も百合之助の有となつた。十一年正月十五日に長男梅太郎(後に明治)生れ、天保元年八月四日に次男寅次郎即ち松陰が生れ、三年十一月十二日に長女千代が生れた。松陰の十一歳頃まで此處に居つたらしい。

團子巖の坂下に松陰の李叔玉木文之進が居つて、天保年中に家塾を開いて附近の子弟に教授し、松陰及び兄梅太郎も、幼時共に此の塾に學んだ。此の時の玉木塾の名が松下村塾といつて居つた。これが松下村塾といふ名の起りである。

天保の晩年に文之進仕途に就いて暫く塾を閉じたが、二三年を経て松陰の外戚久保五郎右衛門が又た



家塾を開くに及んで松下村塾といふ塾名を襲用した。これが第二の松下村塾である。久保家は松本の

新道に面して其の屋敷土地が、杉家の團子巖から新しく移轉した屋敷即ち、今日松陰神社のある所の杉家の舊宅と背中合せの所にあつたから、杉家から久保家へは外の道路へ出ずに背戸から往き來が出来たものである。

松 随つて後に松陰が安政元年の下田踏海の舉に失敗して最初江戸  
下 獄に下り、次で萩に送られて野山獄に入り、安政二年十二月まで  
村 野山獄に居つて、其の月獄を免して杉家の一室に幽囚の身となる  
塾 や、久保塾の弟子が牆一重を隔てて久保塾から呼ばば答へるとい

ふ、一番近い距離にある松陰の幽囚室へ、背戸からやつて來て陰かに難解の字義などを質問するやうになり、遂に五郎右衛門が自分の塾を閉じて之を松陰に譲るやうになつたのが安政三年の夏で、松陰の幽囚室に於ける孟子の講義といふところから、それが始まつて居る。この孟子の講義は、松陰自分に講義のままを筆録して置いた

のが、今日世に行はれて居る講孟餘話である。(一名講孟割記)

最初松陰の講義は縁家の子弟にだけ聴かすといふのであつたが、以前藩學明倫館に於て、家學の山鹿流軍學を教授して居つた時の、特別關係のある者なきが陰かに來て之に加はるやうになり、内密に藩府の方へ周旋する者があつて晴れ立たぬやうにして、謹慎の姿で子弟を集めるのは宜しいといふ諒解が出来たので、松陰も悦んで畠の中にあつた僅か八疊一間の物置めいた離れ家を稽古場に當てて、第三回の松下村塾を其處に開くことになつたのである。

松陰幽囚舊宅



聽て塾生が増加して塾舎狹隘を告ぐるに至り、近所の古家を買ひ、僅かに大工一人を傭ひ、松陰自分も門人等と總掛りの手工事で十疊半の建て増しを爲したのが、安政四年である。

松陰の塾に入塾問答ともいふやうなことがある。新しく入塾を請ふ者が來ると、松陰は之に向つて、

「塾へ來て學ぶやうになると、場合によりては命を捨てて貰ふやうなことが起るかも知れぬが、それでもよいか。」

と聞くを例とした。

「宜しうございます。」

といふ返答を聞かねば、決して入塾を許さなかつた。蓋し松陰はこの時既に幕府の政治を改めて、何れは皇室を世に出さねばならぬとの心組みがあつたからである。

其處で塾生等は何かの事があると、死を決して行くといふと、今度は松陰が之を制して言つた。

「人間の生命はそう輕々しく捨つべきものではない。これが一番よい死所であるといふ所を求めて死なねばならぬから、そんな輕舉妄動をしてはいけぬ。」

といふのが松陰の訓誡であつた。松陰其の人も常に死生の悟りも付けて居りつゝ、決して猥に死を急がうとはしなかつたことは、安政六年十月二十七日の刑死に逢ふに先つこも僅かに二日の二十五日から二十六日の黄昏にかけて、江戸獄中で書き遺して置いた有名な留魂録にも、彼の死といふことに對する見解と用意とが能く書き留めてある。

村塾の増築部に二階といふものがある。観覧者は決して之を見落されてはいけぬ。二階といつても、踏み天井の上である。其處が松陰の休憩所で、門人は階下の室で休憩し、講義は必ず八疊の間で行はれた。

二階へ上る梯子といつても、普通の左官用梯子が懸けてあつた。門人が折々梯子から覗いて見るに、松陰は端坐して、彼の絞柄の短刀を抜いて右手に持ち上げて双渡りを凝視し、左手は膝の上突いて、思索に耽つて居るこゝが屢々あつたといふことである。

松陰は又階上から屢々門人を名指して呼んで問うて、

「例のを言つて見よ」

と言つた。

論語に曾子三省の章といふものがある。

曾子曰く吾日に三たび吾身を省る。人のためにはかりて、忠ならざるか。朋友と交りて信ならざるか。傳へて習はざるか。

である。松陰は常に思ひ出したやうに講義の中ばでも之を言ひ出して、門人に覚えさせ、決して忘れ

るなよと言つた。「例の」はそれである。

門人が梯子から顔を出して「曾子曰く」でそれを暗誦すると、松陰は、良し／＼と言つて之を褒めた。

松陰の書を講ずるや、曰く、

「書は昔のことが書いてある。今日ならば如何にすべきか。」

と言つて、弟子に之を考へさせる。弟子が之を考へて答へると、

「今日でも位置境遇によりて爲すべきこゝが同様でない。お前

さんは如何にするか。」

と言つて實行方法を指導する。是に於て一日松陰に學べば一日實行にこれが現はれ、一節松陰の講義を聴けば必ず一節の實行が進んで行つた。



高杉晋作



前原一誠

安政五年の夏大老井伊直弼が勅許を待たずに諸外國と條約を結んだのが、天下志士の憤慨する所となり、江戸に於て志士の間は大老要撃の計畫があるが参加せぬかといふこゝを秘密に長州へ交渉があつ

た。松陰門人と謀つて曰く、

長州人魂こしては天下を率ゐるといふことを忘れてはならぬ。關東に於ける計畫は至極賛成であ

るが、長州人魂が折り合はぬから、關東の方は其の方の志士

に遣らせて、我々は老中間部詮勝が京都に来て、朝廷に恐れ

多しとも思はず、頻りに志士を捕縛して居る。之を要撃して

關東の擧と呼應することにしやう。

よ、爰に初めて松陰は門人と共に皇國のために死所を定めて十七

人の血盟を爲したのがこの年の十一月である。藩府之を探知して

松陰を再び彼の一室に嚴囚して、門人との接觸を禁じ、次で再獄

の命を下した。

吉田年丸、佐世八十郎(前原一誠)、品川彌二郎等の門生八人が、

この再獄の命は名義が立たぬといふので、土原の周布政之助の宅

へ詰問に行くに、八人は又た拘束を蒙つて仕舞つた。



山田顯義

木戸孝允

伊藤博文

塾に残れる弟子等は師を奪はれ先輩を抑留せられて悲憤の涙禁する所を知らず。誰か遂に劍を抜い

て悲歌慷慨の餘りに塾柱に斬り附けたものを今も塾に於て見られ

る。

松陰終に再獄の身となつて、安政六年五月二十四日の夕方まで野

山獄に居つた。松陰の獄にあるや、獄吏福川犀之助、獄卒孫助等が

皆松陰の至誠に感動して門人となつた。二十四日夜犀之助の好意

により松陰は一夜陰かに松本の杉家に歸つて一族門人に訣別を惜

んだ。

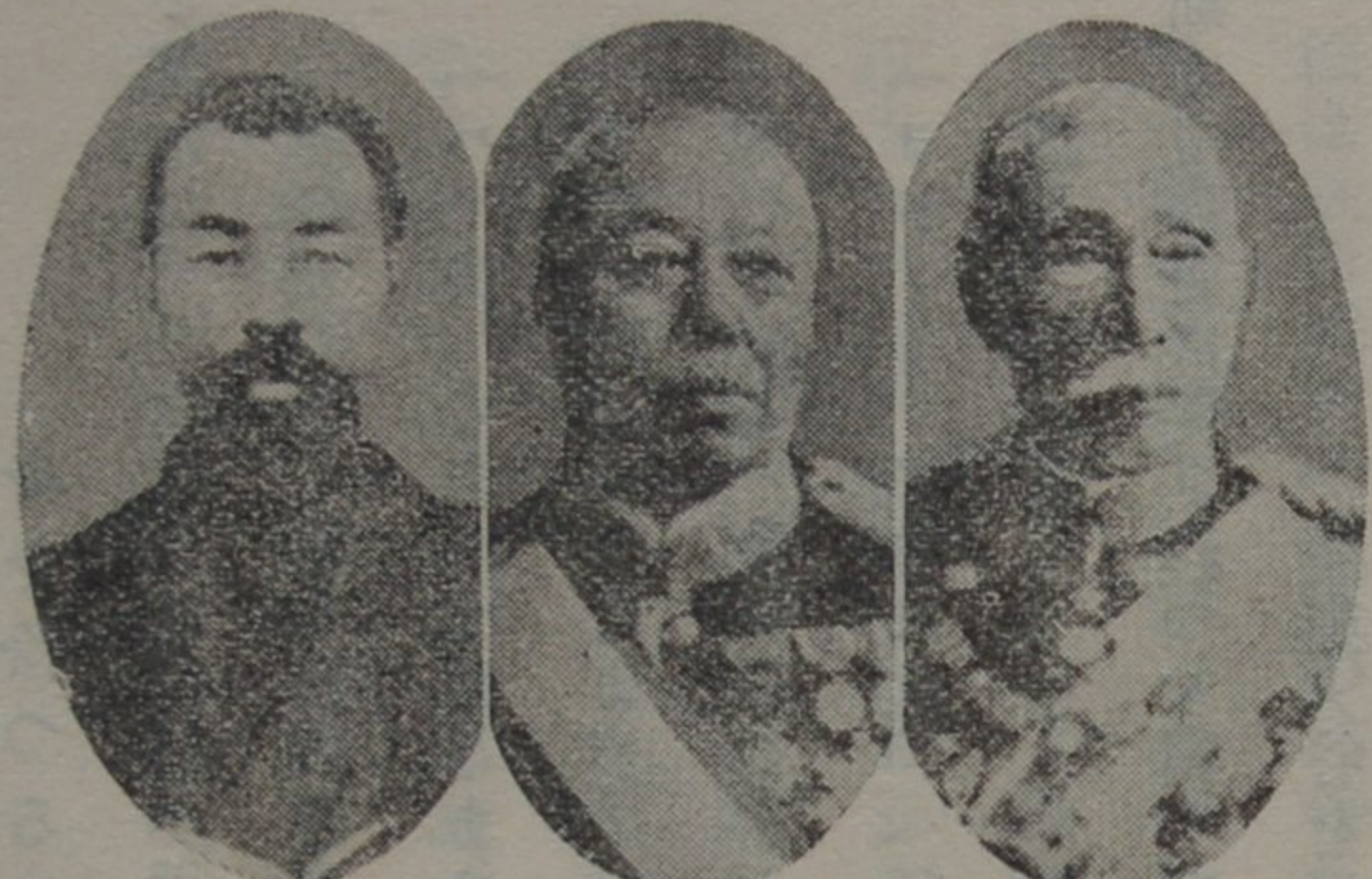
五月二十五日の朝梅雨霏々として陰雲低く垂れて居る時、松陰は

江戸へ檻送せらるる身となつて家を出ねばならぬ。養母熊子刀自

は前夜から負けじ魂で堪え忍んで居つたものの、今は早や悲哀禁

せず

「何か一筆我が身にも書いて賜はれ」



品川彌二郎

野村靖

山縣有朋



こて出した紙に、松陰は玄關の庭に立ちながら、矢立を取り出して、

かけまくも、君が國こそ安かれば

身を捨つるこそ賤が本意なれ

と書いた。松陰は又た村塾へ行つて窓から覗いて、幼少な弟子が集つて居るのに言つた

「皆のものよく早くから集まつて呉れた。例のを忘れはすまいの。」

「ハイ決して忘れは致しません。」

「それでは言つて見よ。」

「ハイ先生様、曾子曰く……………」

「ヨシ、松陰は江戸へ行つて死んで歸らぬかもしれぬが、皆の者がそれを忘れねば、村塾も繁

昌し、皆も進んで行くから、必ず忘れるなよ。」

斯くて藩吏に促されつゝ輿中の囚客となつて萩を出でた。

檻輿大谷を過ぎ涙松のもこにて

松陰

かへらじ思ひ定めし旅なれば

一しほぬるゝ涙松かな

松は萩市椿村の大谷の路傍にあつたが、今は枯れて代りに石碑が立つて居る。

凡そ萩に來つて村塾に松陰の昔を偲ぶ者、以上の談だけは少くとも之を思ひ浮べて、以て史蹟の前に立つことが必要である。松陰が抑も何事を教へたものであるか。又如何にして僅か二年半の短日月を以て十八疊半の陋屋から五大臣（伊藤博文、山縣有朋、品川彌二郎、山田顯義、野村靖）二參議（木戸孝允、前原一誠）及び高杉晋作、久坂玄瑞以下十數名の勤王殉難を以て贈位の恩命を辱くしたる士を出したかといふことを詳かにせず、單に松陰を過激の急先鋒でもあるかのやうに誤解する人があつては遺憾千萬であると思ふ。特に又た今日のやうに、自己の放縱は之を反省することを爲さず、頻りに人の非を咎めて攻撃を事とするやうな世風では、社會が果して進歩するであらうか。自省改善を念とする松陰の大遺訓に世を舉つて猛省するの必要があるかと考へる。

(七) 萩の南郊

萩の南郊とは略ぼ橋本川の左岸一帯の地である。或は江流に臨んで波光と相映じ或は丘陵に據つて散

點の民家に交はる所に、神社あり。佛閣あり。古戰場あり。名蹟あつて史蹟の多種多様なることは、遙かに東郊の上に出づるものがある。

惜哉、聊か區域が廣くて、跋涉の勞があるのと、東郊の史蹟のやうに單純でないので、來つて萩を訪ふの士が多くは南郊を顧みないのは、誠に遺憾千萬である。希くは好古の士特に一日を南郊の遊覽に充て、隨喜湯仰の情を恣まゝにせられんことを。

山陰線萩驛に下車して南郊を遊覽するものゝ假定して順路を考へるのが一番便利であるから、暫く其の意味に於て之を案内するに、先づ驛を距ること遠からぬ椿西小學校の横手に、孝女渡邊つちの舊宅がある。つちは隣村三見村の中山の生れであるが、三歳の時に生父家を出でて行衛不明となる。つちは生母と共に悲歎に暮れしが、つち六歳の時遂に生母と父を搜ねて四國へ赴く。時に文政八年の春なり。然るに十月の頃阿波國七條村にて母病死し、つちは善兵衛といふものの情けにて母を葬り、郷里に歸ることが出來た。十八歳にて渡邊家に嫁したるがよく夫清右衛門を助けて、家事を勵み、生計も稍々裕かきなるにつけて善兵衛の恩誼に酬ゆるため、伊豫へ赴きしは安政四年亡母の三十三回忌の年なり。其の後も僅かながら貯蓄をなしては官に獻じて窮民救助の資に充て、以て我が幼時のこころを忘

れざる奇特の者なりとて、藩公より米銀を賜ひ、又た年々薄録五挺宛を下賜せらるることとなりしは慶應二年九月にて、人之を孝行録と呼んで尊重した。

孝行録

香川幸舍

賜はりし孝行録は世の人の

あしき心根刈り拂ふらん

驛通りに公共事業に盡した藤田清助の碑があるのを見て、次に金谷天神社に詣づるが宜しい。社格は郷社に止つて居るが、代々の藩公の崇敬が深かつたので、毎年十一月十五日の例祭には今も大名行列が出る。踊り車が出る。萩は無論のこと、大に近郷近在を動かして、詣人蟻集し、爲に臨時列車が出るの盛況である。例令それが祭禮の日でなくとも老松森々として緑に、池水を廻る岩石、蘚苔濃かなる所、朱門廊郭誠に古雅にして、神燈狛犬、悉く懐古の同伴たるに足る。

此處から程遠からぬ椿町の蓮生寺には昭和御大典の際の總理大臣たりし田中義一大將の墓がある。奥金谷には但馬の生野銀山の義軍を擧げて文久三年十月十一日朝來郡山口村妙見山の血潮の紅葉と共に散り、變名南八郎を以て聞えて居る、河上彌一郎誕生の舊宅がある。彌一郎の氣魄は當時彌一郎が自

書して妙見堂に奉納したる次の歌に之を見るべく、

議論より實を行へなまけ武士。

國の大事をよそに見る馬鹿。

彌一郎の憂國に燃ゆる一念も、忠烈の純情とは次の澤三位宣嘉卿の歌に於て之を偲ぶことが出来る。

もののふの心をうつせいさぎよき

この川かみの水の鏡に

橋本川と松本川との分岐する所に太鼓灣がある。滔々の水、矢の如く對岸の川島堤が此處まで突き出で、天王鼻と呼ばれ、春和の候には堤の櫻花が咲き亂れて銀水に映するのを見るに絶好の所である。聊か上手の方に六本松といふ六幹の老松が盤踞して、清流に臨んで居る。附近は今は畑になつて居るが、昔は一面の芝生で、藩兵の兵式操練所であり、彼の吉田松陰の如きも、屢々門生を率ゐて、此處に山鹿流の軍學を練つた。

程遠からぬ所に藩の鑄砲所の跡がある。嘗て長州藩が馬關に於て行つた攘夷の大砲を鑄造した所で、遺蹟を繞る堰流の音には今も尙ほ憂憤の餘響がある。

傳説に據るに戰國時代に東郊の小畑の長添山に雲州尼子氏の將松倉伊賀が居つた。其の頃南郊の奥の茶臼山に山口の大内氏の將岩成豊後が居つた。斯くて兩家の勢力の接觸點が萩の平野で、伊賀も豊後との戰つた所を陣が原といひ、豊後が戰敗れて淵に投じ死んだ所を大將淵といつて居る。原と淵と今や其の地點が明かでないが、惟ふに六本松の附近の沖原といふ所も其處の川の廣淵が、どうも昔の跡らしい。

國守長者の家が沖原にある。脈々の後裔が千年に近く其處に住んで農業を營んで居つて、日本國中で農業の最舊家であるといふ懐しさもあるが、家の側の老樹の間に青木の前の神社があつて趣味ある傳説を傳へて居る。傳へて曰く、昔聖武天皇奈良の大佛殿を建立の時に、長者が白牛一頭を率ゐて加勢に參つた。建立用の大木大石を運ぶに、この白牛が尤も能く働いて、偕愈々二本の母柱を曳引するに當り、他の牛は皆力足らずして膝を突いて仕舞つたが、この白牛一頭が獨り怪力を現はして、母柱を引き行くことが出来た。天皇淑感あつて、白牛に飼料の地を賜はつたのが牛敷庄といつて即ち昔の萩であり、長者に天皇の寵姫を賜はつたのが青木の前である。天皇又た勅して長門の牛には永久に重荷を負はずこゝを止めよとの事であつて、今となつても長門の國では牛に物こそ引かせても、物を負は

すここはなさぬ。

牛死して供養のために出来た寺が對岸の白牛山龍藏寺である。時は大同年中で平城天皇から勅額を賜はり、萩隨一の古刹である。寺門碧流に臨んで梵鐘夕景に響く所、實に無限の史味を湧かしめる。

仰いで日輪山南明寺に詣でる。本寺は山麓ホシテラにあつて、昔から絲櫻の名物があるので、春は觀櫻の客が多く集り詣でる。約五町計り坂路を登つて觀音堂がある。本尊も脇立も共に行基菩薩の作で、今では國寶になつて居る。萩の夜の街から南山を仰ぐと、山の中腹に佛燈煌々として、何時でも終夜無明の闇を照して居るのが、この觀音堂の佛燈であることから、三歳の童子も南明寺の觀音を知らぬものはない。登臨の眺めは又た實に無類ともいふべく、川内の萩の地形の鳳雛の姿を見るのは、此處が一番宜しい。

山を下つて山腰を繞り大谷の觀音橋に出で、程近き涙松の遺跡を探ねるのが尤も宜しい。次で短冊田の相接して居る所を横切つて向ひの山の腰の方へ移つて椿八幡宮に詣でる。境内閑寂で敬虔の念自ら湧く、此處の椿神苑は山腹に設けられて居つて、近くは脚下の萩驛に汽車の出入する所から、遠くは萩灣に入り來る滿鮮通ひの蒸船まで、凡て一眸の内に眺め得るは此處である。

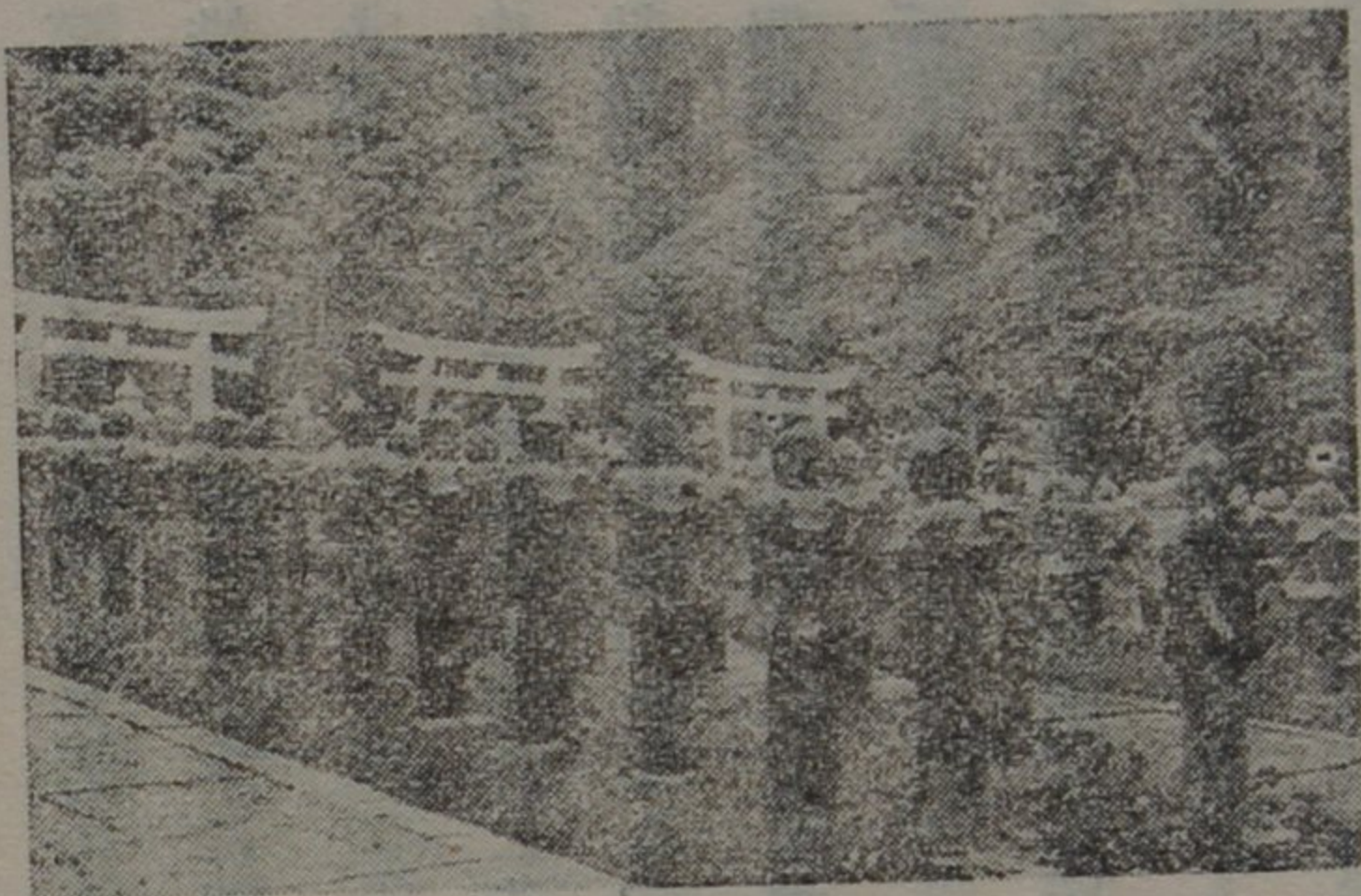
八幡宮の隣りに光福寺があつて、俗に山の寺と呼ばれて有名である。境内に贈正五位中島名左衛門の墓がある。名左衛門は長崎の人で、長藩の聘に應じ、馬關に於て攘夷の砲臺築造中、暗殺に逢ふたが、惜しい人であつた。寺の下に幕末防長海軍の創建者北條源藏及び弟瀬平の生れた、躑躅の庭の屋敷がある。

山腰を遶つて靈椿山大照院に詣でるこゝが順路であらう。寺は元と觀喜寺と言つて桓武天皇の御草創、勅額下賜の道場であつたから、時代から言ふと龍藏寺より古い。併し中途廢絶して居つたのを毛利氏四代の藩主大照公が大に之を修められて、南禪寺派の巨刹となつたので公の法諡に因んで大照院と呼ぶやうになつた。

寺内に秀就、綱廣、吉廣、宗廣、治親、齊熙、齊廣の七公の廟があつて、彼の東郊の東光寺の藩公の廟と交互に之を埋葬しられたものである。森々の樹蔭、影蛾の池水、門前廣濶の眺め等は遙かに東光寺以上である。花宮淨院に看經の聲を拜聽すれば近く極樂の界限に接するの心地もする。

毛利家の祖廟は向ひて右手に大照公の御墓があるが溪水に架したる小石橋を渡つて、樹蔭自ら一區を爲した所にある。移封當時天樹公は、例令藩政を視られたとはいへ、公けには既に退隱の身であつた

から責任上大照公は既に移封當初からの藩主であつた。随つて萩市に防長二州は公の創業によりて其の形容を定めて貰つたこゝが極めて多い。公の廟墓につきての特徴は梨羽頼母、小川兵部、信常右



大照院

京、山名内膳、村上監物といふ五人の殉死の墓が其の側に在り、更に頼母に家臣山本又兵衛の殉死の墓が伴つて居ることである。泰巖院綱廣公の墓が其の左に並んで居る。公は大照公の第四男で母は越前中納言結城秀康の長女喜佐姫で徳川家康の孫女であるにも係らず、徳川氏に屈するを快しとせず。大に防長士氣の作興に力め、又大に有爲の士を登庸して善政を行はれ、藩の憲法ともいふべき、萬治制法三十三ヶ條は實に公の定むる所である。

觀光院宗廣公は又大特に明敏の譽れの高い藩公であつた。關東の刀根川普請に大に偉蹟を遺されたこゝがある。

最左翼の高い別區域の所に崇文院齊廣公の墓がある。公は林大學頭が常に亞聖と呼んで敬慕して居つたといふ位に、學徳を備へられて居つて、孝を以て閩邦を治める

こいふのが公の素志であつた。惜哉在世久しからず、逝去の時に特に遺命して高處に葬らしめ地下より廣く領國を見渡して之を愛護すると言はれたので、斯く高い所に墓があるのである。

寺門を辭して玉江驛の方に轉向して行く。洋々の流れを右にし、鐵路を左にして、河岸に沿ひて歩みを運び面影山の麓を過ぎて、玉江驛に辿り着き、暫く行装を整理して、序に玉江浦の觀音院に詣でるが宜し。

觀音院の樓閣は又大玉江驛頭に於て指月古城山と相對しての唯一の景勝である。堂の階砌から練壁を隔て、橋本川を望むと宛然一個の湖水である。中渡堤の老松は水に影を浮べ、玉江橋は虹の如くに架して晝の眺めの宜しいことは無論であるが、此處は特に觀月の名所である。若又た小舟に棹して、湖中に釣糸を垂るれば細鱗忽ち躍つて舟中の物となる。

元祿年中に藩公が山田原欽、安部春貞、雲谷等璠三人に命じて萩八景を撰ばしめられ、原欽が詩を作り、春貞が歌を作り、等璠が景を畫いて、之を奉つたのが、能く水郷の萩を代表して居る萩八景である。この八景は東郊の松本川の河口なる鶴江の夕照から始まり、川筋を上つて橋本川邊に移り、今度は河邊を下つて河口の倉江の歸航で終つて居る。即ち松本、橋本の二川と、萩八景が川内の鳳雛形

の萩を抱いて哺育して居るのである。今次にその歌だけを載せる。

鶴江夕照

鶴のゐる入江の村の松原に、残る夕日のかげのさやけさ。

下津江落雁

有明の入江の蘆のほのくゞみ、明る空より落る雁がね。

中津江夜雨

更くる夜の雨のふる江の賤が家に、残るも細き燈のかけ。

上津江晴嵐

山川の瀬々の朝霧たえくゞに、江の水見えて行く嵐かな。

小松江晚鐘

山の端もかすみ渡りて遠き江の、松よりつたふ入相のかね。

櫻江暮雪

白雲の夕べの色はやまさくら、江の波かけてちるかきぞみる。

玉江秋月

江の水のしづく影さへ白玉を、みかくばかりの秋の夜の月。

倉江歸帆

遠島や波もひとつにみどりなる、空より出でゝかへる釣船。

玉江浦には事天朝にまで聞え上げたる、漁村青年の修養道場として世に名高い青年宿がある。奥玉江の梅屋敷は名高い七卿落の際の一人東久世通禧卿が萩に来て暫く居たまひし所である。楞巖菴には畫聖雪舟の門人雲谷等顔の墓と碑とがある。

凡そこれ等南郊の名所舊跡を一覧して趣味ある萩遊覧の第一日を過し、徐ろに市内に投宿して第二日の計を運らすか、或は南郊の遊覧を第二日第三日かに廻さるれば萩を観ること二泊三日の程である。鳥渡長滞留のやうであるが、必ず遊子をして悦ばしむるものがあるであらう。

○萩の南郊案内一覽

名	稱	所	在	記	事
龍藏寺	(臨濟宗)	中津江		境内に慶應二年六月二十七日藩火薬庫爆燒の際の遭難者の墓あり	
三浦梧	樓誕生地	全	白	陸軍中將 名士	
螢火	山	目	原	山麓附近阿武川沿岸は螢の名所なり	
六人	本松	沖		藩兵操練舊跡	
大砲	造方舊跡	全		關係者荒地家郡司家其の附近にあり	
國守	家	全		舊家	
南明	寺	日輪山に據る		國寶正觀音像及び千手觀音像あり又嘗て萩の名物たりし籐細工の不動明王の像あり	
小倉	四賢墓	和泉寺址	谷	藩の名儒小倉家の墓地あり	
筆染	遺跡	大		和泉式部の傳説あり	
涙切	松	全	坂	特に松陰史蹟として著る	
一首	里	鹿		舊藩の死刑場	
椿八幡	宮塚	全	海	舊形を存するを以て珍し	

光福寺	(淨土宗)	全		有名なる千佛像の殘軀あり。又た長崎の人にて築壘の泰斗中島名左衛門(贈從五位)の墓あり	
北條源藏	誕生地	全		防長海軍の建設者	
御堀耕助	舊宅	全		贈正五位	
大照院	(臨濟宗)	小松江		藩祖廟あり	
嶽觀音	宅	大照院の後山		國寶赤童子像あり	
孝女	つち舊宅	濁り淵		萩四孝の一人	
金谷天神社		金谷		郷社	
河上彌一郎	誕生地	奥金谷		贈從四位	
蓮生寺	(眞宗)	椿		男爵田中義一大將の墓あり	
宮城彦助	舊宅	玉江川屋敷		贈正五位	
時山直八	誕生地	奥玉江		贈正五位	
中村九郎	舊宅	山		贈正四位	
雲谷等顏墓		楞巖庵		畫家	
玉江	坂	楞巖庵の後山		舊道	
梅屋敷		白水小學校右		七廻遺蹟	
玉江神社		玉江驛後方		舊五鬼權現社にて其の後山は藩士の心膽を練るため夜籠りをなしたる所	

倉	玉	青	觀
	江		
江	櫛	年	音
	風		
濱	呂	宿	院
倉	潮	全	玉
			江
江	坪		浦
眺望絶佳 四ヶ所ありて青年の修養宿として天聽に達 し又た表彰を蒙る 保養適所 磯遊の適地			

(八) 堀内史蹟と菊ヶ濱

堀内は萩の舊城郊内である。往時は町から堀内に入るに三つの總門があつた。今日玉江驛から下車して堀内に入る人は平安古の總門筋といふのを通るのである。萩驛又は東萩驛の方から町の本通りを経て堀内に入るのが、中の總門である北の總門は更に北にあるが、遊覽の客は多くはそれを通られぬであらう。

町と堀内との境界が三の郊の濠であるが、それは今殆んど埋れて居る。二の郊の濠は疏水の指月橋を渡つた行手にあつたが、惜哉、大正年中の疏水開鑿の土砂の捨て場として悉く之を埋めた。残るは一の郭の濠と、之を繞りて構へられた昔の五層の天守閣以下の殘礎と城壁の石垣とである。僅かに城壁

の残れるものに銃眼の残つて居るのが見られるのも懐しい。



抑も萩城は之を呼んで指月城とも言ひ、指月山を本據にして之を築いた山城式ヤマじょうの築城で、詰丸は山上にあり。之を呼んで要害といつたので、古老は山のこゝを又た要害山ともいつた。山頂から抜け穴を以て山背の磯際に下り、船を以て海上に航し出づるの構えになつて居つたが、抜け穴は今埋没して、入口だけが山頂に残つて居る。

城 惟ふに其の昔輝元公(天樹公)が藝州吉田から廣島に新城を築いて移られたのは、僅かに文祿初年のことであつた。關ヶ原合戦に一敗のためは言へ彼の巍々たる廣島の天守閣に別れを惜んで萩へ移られた公の眼には言ひ知れぬ悲哀の涙が浮んだこゝこ思ふ。

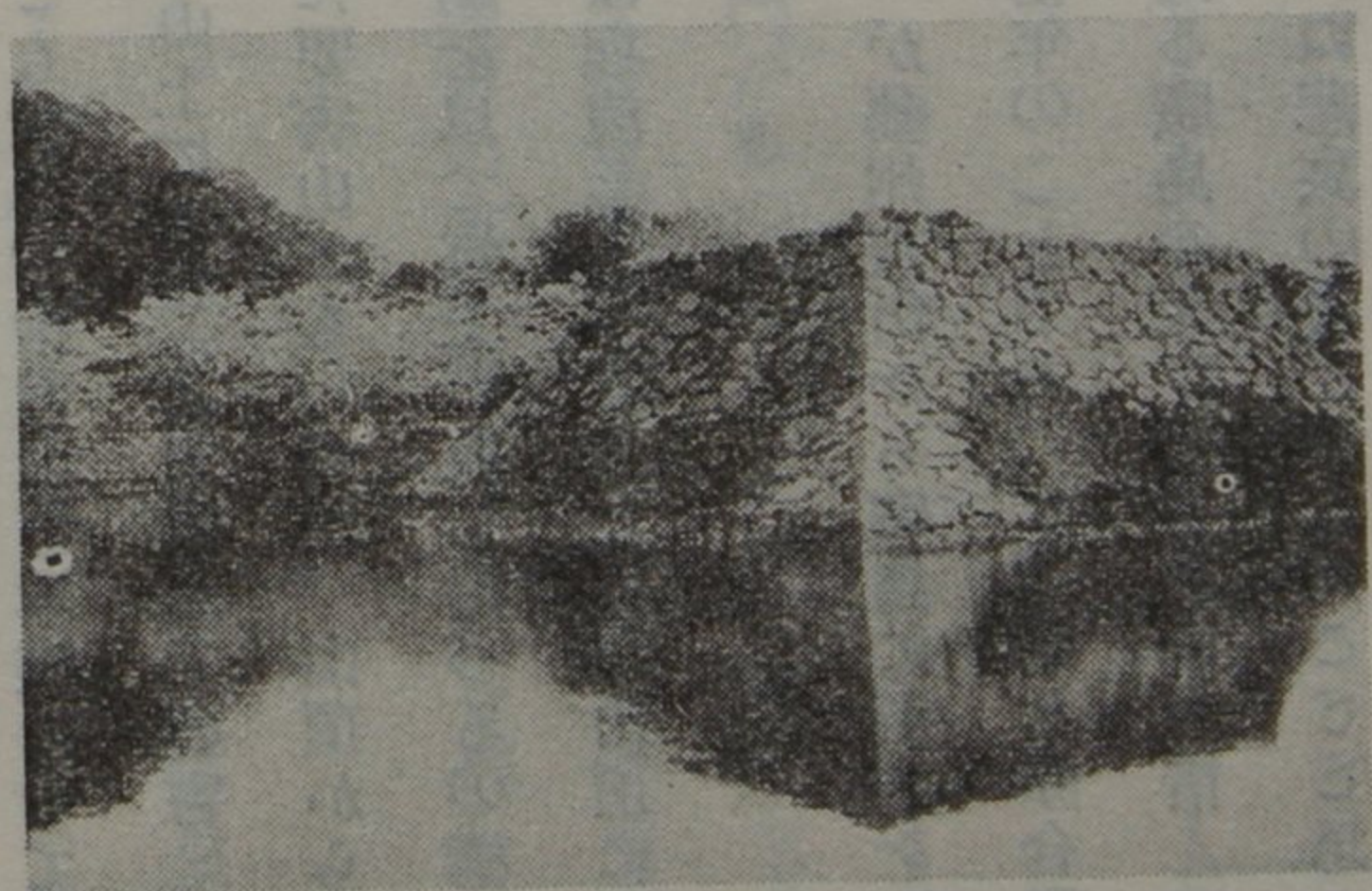
乃ち新城の繩張りひらしりに於ては平城式の廣島城の構へを併用して第一郭の濠に沿ひて廣島城のやうに天守閣を構へられたので萩城は一面に於て平城の構へをも兼ねて居るこゝを心得て萩の築城を研究して貰



ひたいのである。

築城前の指月山を語るに平安時代に土地神社といふ神社が、山の西麓に崇祀せられ、戦国時代に指月山善福寺といふ禪刹が山の南麓に在ることになった。輝元公築城の際に善福寺は川内の川島に移され、土地神社は重就公に至りて之を改修して祖靈を合祀し、後に朝廷から仰徳大明神の神號を賜はつた。明治時代となりて、祖靈は山口に遷座して土地神だけが残り留り給ひ、改めて明治十二年に今の志都岐山神社が、山口の別格官幣豊榮神社の遙拜所として建てられ、總て縣社となつて祭神は元就、隆元、輝元、敬親、元徳の五公を主神とし、これに他の歴代の藩公を配祀してある。

今の神社の位置は昔の城の御臺所の後手に當つて居り、今日松樹枝を交えたる社前の廣場に萩城の新碑のある所が御殿の大廣間であつた。而して舊御靈社の跡は今も昔の所に残つて社碑だけが林中に現存して居る。土地神社は今の



址閣守天城月指萩舊

神社の右側に小祠があつて仰徳大明神の神額が掲げてあるが、抑も土地神社は清和天皇の貞觀十五年

十二月十五日に特に勅して従五位下を授けられたことが三代實錄にも見えて居る、誠に由緒の社である。

花江茶亭 (毛會利敬親公親藩志士)

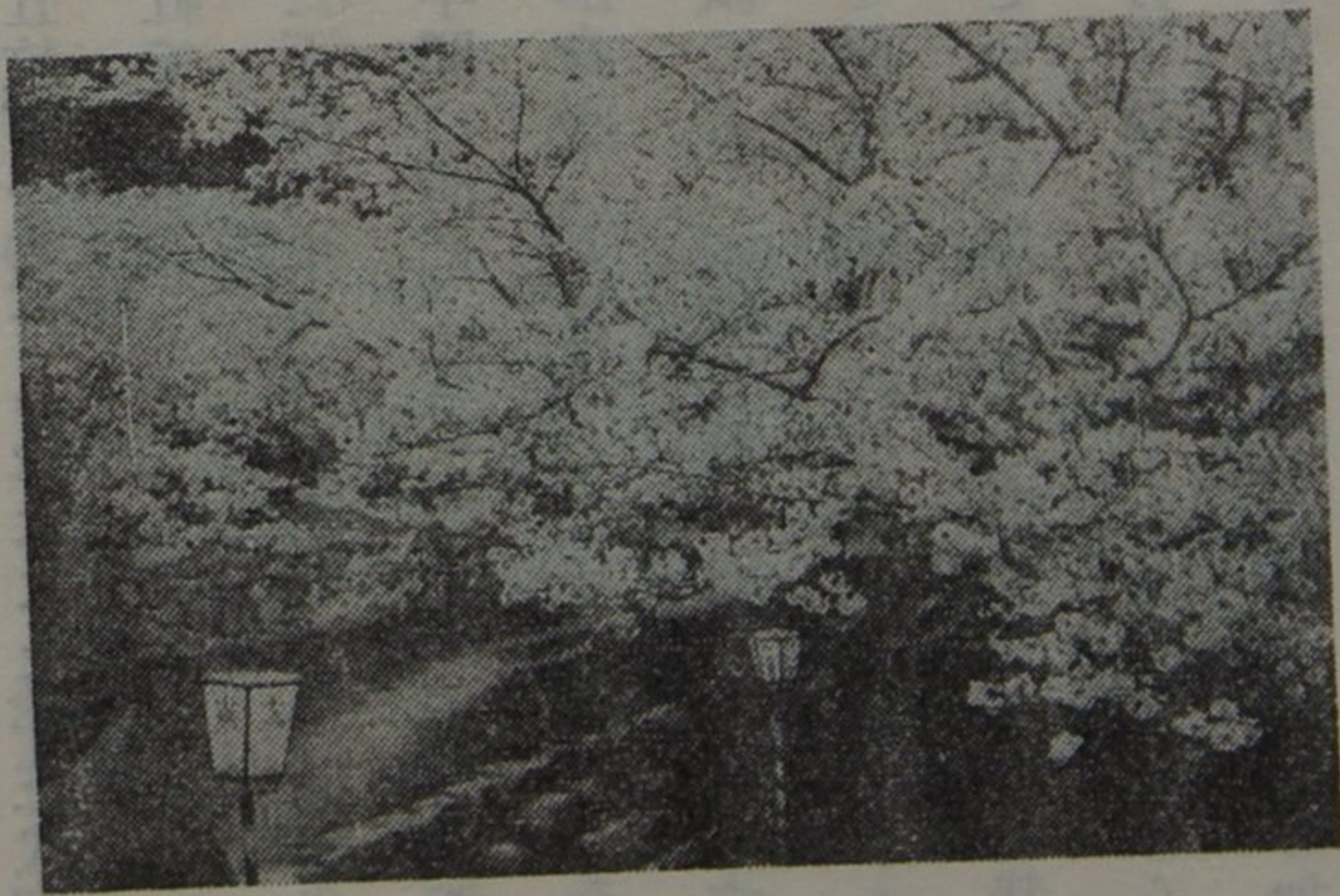


第十六代忠正公の封を襲がれた天保八年四月二十七日の前年の天保七年には如何にしてか、一年間に清徳、邦憲、崇文の三公が逝去しられた。忠正公は危険の我が身邊にも及ばんことを恐れ、全く其の器を韜晦して、臣従の甲派にも乙派にも更に迫害を加へず、又た特に優遇するが如きことを避け、小事は彼等の言ふがまゝに之を爲さしめ、大事は熟慮中といふを以て之を握りつぶして裁許せられず、何かにつけて自分の意見を明示することを避けられたので、臣下は見ても凡庸の主となし、何れの派からも危害を加ふ

るに至らなかつた。斯る内に米艦浦賀に來り、國事紛糾するに至るや、臣従は朝廷派と佐幕派との二つに分れた。賢明なる公は朝廷擁立の素願を秘して、表面は曖昧の態度を以て過ぎ、陰かに茶の湯に

托して別館花の江邸の茶室に夜間股肱の臣を會し、全く格式を棄て、同室に國事を懇談し勤王奔走の密議を凝して京阪の間に周旋し給ふ所があつた。維新後別館が民有となるに際し、當時招致を辱くしたる遺臣が維新發祥の記念として茶室を請ひ受け、費を出して之を舊城址内に移築したのが今日指月神苑内の松間に在る雅趣の茶亭である。亭の四隅の柱に折釘の残れるは、夏の夜に公の股肱の臣が同じ蚊帳に入りて夜を過し王事に心を碎かれた昔を語るの唯一の記念である。

神苑内の東部に東園といふのがある。第五代泰巖公が稻田を此處に設け、親しく牛を役して農事を行ひ、以て勸農の政を布かれた記念地である。後に庭園となつて居たのを忠正公が再び一部を耕田に復舊して農事を勧めらるる所があつた。維新後全く荒廢して松杉の茂るに任せられて居つたが大正十五年春攝政宮萩に行啓して此處に台臨あらせられんことをや、聊か修築を加へて今日の觀を爲すに至つたものである



志都岐公園

○萩城懷古

伊藤博文

江山秀麗似仙郷。

依舊花園尙帶香。

往時茫茫人不見。

古城秋色自荒涼。

(譯) 江山秀麗仙郷に似たり。舊に依つて花園尙ほ香を帶ぶ。往事茫茫として人見えす。古城秋色自ら荒涼たり。

○過瀨城有感

落合濟三

海城落日萬家烟。

故園秋晴喬木顛。

行想先公行樂迹。

復看遺老泣山前。

(譯) 海城落日萬家の烟。故園秋晴喬木の顛。行く／＼想ふ先公行樂の迹。復た看る遺老山前に泣く。

城址を去つて菊ヶ濱に赴くことにする。指月橋の前に天樹院址があるのは昔の吉見正頼の居館で、毛利輝元公入城の際に公の別館となり、公逝去して菩提寺となつた。天樹院は即ち公の法諡であるが、

今は寺は廢して公の廟所ミヤに殉死の長井次郎左衛門の墓ツツミが残つて居る。  
 天樹院のある筋を猫ノ丁ネノチヨウいふことにつきて傳説がある。長井次郎左衛門は維新前に名士ナシとしての評判の高い長井雅樂の祖先である。雅樂時代の家は土原の山中町にあつたが、次郎左衛門時代には天樹院筋に居つた次郎左衛門に一匹の愛猫が居つた。次郎左衛門の殉死するや、愛猫は悲しんで食はず。日夜町筋を彷徨して泣きつゞけて居つたが、次郎左衛門の七七の忌日に其の墓側に舌を嚙んで死んだ。家人之を憐んで猫を院内に葬つたのが、天樹院の猫塚の由來であり、世人遂に町名を猫ノ丁といふに至つたといふのである。著者幼少の時にはこの猫塚ネノツツミいふものがあつたが、今は取り崩されて無くなつて仕舞つた。

縣立秋中學校の門前の筋を北に歩んで菊ヶ濱へ出づる所には、舊藩時代に松原御門一名高勾麗コクリガタチ御門ミカドいふがあつた。古記に據るに昔此處に高勾麗コクリガタチいふ丘陵があつたのを築城の時に均平して倉庫を建て連ねられたものである。高勾麗は即ち高麗で今の朝鮮コリアを見て宜しからう。菊ヶ濱の古名は高勾麗濱コクリガタチといつたことも、古記録に見えて居る。コクリがキクリに通ひ、更に「リ」が省かれて菊ヶ濱キクガハなつたといふことコトから考へると、何時の頃か高麗軍が來り侵して、我軍が之を撃退したものであらうこ

言ひ傳へられて居る。

幕末に當つては藩兵が此の濱に海陸戰の演習をなし、攘夷の大砲も据えられて居つた。文久三年攘夷令が朝廷から下つた時には藩士皆下關に赴いて砲壘を固めたので、留守に居残つた土家の婦女が中心となり、濱に土砂を盛つて防禦の臺場を築いたのが松原から遠く濱崎の洲口に至るまで透迤として今も残り、女子臺場と呼ばれて當時の舉藩一致キツクいふ緊張味を語つて居るのである。彼の有名な「男なら」の俗謡はこの土工の際に歌はれたものである。今日では、この臺場が御代泰平の日本海を往來する船舶フネに、遠く韓山の雲に入るの海鳥の飛ぶを眺める絶好の場所になつて、濱邊は夏の海水浴場に頗る適地であるとして殷賑の一盛をも見るなど、誠に思出の深い、風景絶佳の處である。

男ならお槍やりがついで御仲間になりと、ついで行きたや下の關。尊王攘夷ウヂノミチに聞くからは、女ながらも武士の妻、まさかの時にはメだすき。神功皇后さんの、三韓退治が手本じやないか。——おつしやる通り。(後にはオオシヤリ、シヤリと歌ふ)

### ○菊ヶ濱の四季

春

香川幸舍

見島路は霞の中にほの見えて、

寄する磯波音しづかなり。

夏

海の子の聲賑ひて菊ヶ濱、

通ふ沖風夏なかりけり。

秋

夕づく日指月の山にかくれつゝ、

網引の船の聲いそぐなり。

冬

白波の散るかと思れば濱千鳥、

吹く荒風に亂れつゝ舞ふ。

川内萩の總氏神春日神社が堀内の南部に鎮座し、大同年中國守長者が奈良の春日神社から勸請し來つたといふ社傳であるから、萩に於ける最古の神社である。廣馬場の櫻ミ祭禮の時の競馬とで有名であ

るが、舊藩時代には競馬の騎手が落馬すると殿様から御手當に米二俵を下賜せらるる例になつて居つたので、春日の競馬こいへば最後に騎手が、態と馬から落ちるのを例として居つた。境内廣く何時も清掃の箒目が届いて居つて神徳赫耀として居るのは有り難い。

○堀内案内表

名	稱	所	在	記	事
明倫古館	社址	倉田町	横丁	地名を今、古明倫館といふ	
春日	社	春日	馬場	縣社	
有地品之九	舊宅地	春日	社東角	海軍中將	
國司信濃	舊宅	萩	中學校前	殉難四大夫の一人、贈正四位	
福原越後	舊宅	本	町	全	
益田彈正	舊宅	北	總門筋	全	
清水清太郎	舊宅	指	月橋手前	全	
天樹院	(臨濟宗) 址	指	月山麓	輝元公廟所	
舊城	(臨濟宗) 址	指	月山麓	毛利氏十四代間の居城	
洞春寺	(臨濟宗) 址	指	月山西南麓	現に千部讀經堂殘存す	

滿願寺址(眞言宗)	東園北隣	毛利氏祈願所
宮崎八幡宮址	指月山東麓	毛利家の氏神
基督教者墓地	深野町	元牢死の信者の墓ありし傍に加設
花江邸址	現時の長井家	舊藩主別邸
忠魂碑	春日社馬場	日清日露戦役戦病死者の招魂碑
素水園	中總門入口	田中大將銅像あり
女子臺	菊ヶ濱一帯	文久三年攘夷の際の擧藩一致の史蹟
阿武松原	菊ヶ濱松原	昔の阿武松原は大井濱にありしを此處に移したるもの

○指月神社境内案内表

名	所	在	記	事
大鳥居額	参拜道	池に架す	有栖川宮御筆	
太鼓橋	池に架す	池の手前の獅子	藩學明倫館聖廟前の泮水に架したる橋	
獅子手鉢	拜殿の前庭内右方	参詣裏道	名儒中村鼎撰並書	
石の鉢	参詣裏道	春海碑の前にあり	明倫館聖廟前の手水鉢	
馬島春海碑			吉田松陰の門人にて子弟に教授し、門下より文部大臣柴田家門を出せり、醫	
紅葉井戸			藩公の御茶の水	

(九) 城東區

築山附近及池の西半	紅葉井戸の側	藩公居館の御庭の舊態のま、
社務所	参詣道の西側	藩公居館の在りし所、今の建物は福原大夫の居館の一部
前田孫右衛門碑	全東側	十一烈士の一人
近藤元統墓	全	築城前よりありたるもの(松は後に植えたり)
本丸橋	本丸濠に架したる参詣道の正面の橋にて側に社碑あり	古名極樂橋、後に幸橋、今は俗に眼鏡橋といふ
有倉松	本丸橋の前	吉見一族有倉家の邸址 往時の松は枯れて今の松は稚種の成長せるものなり

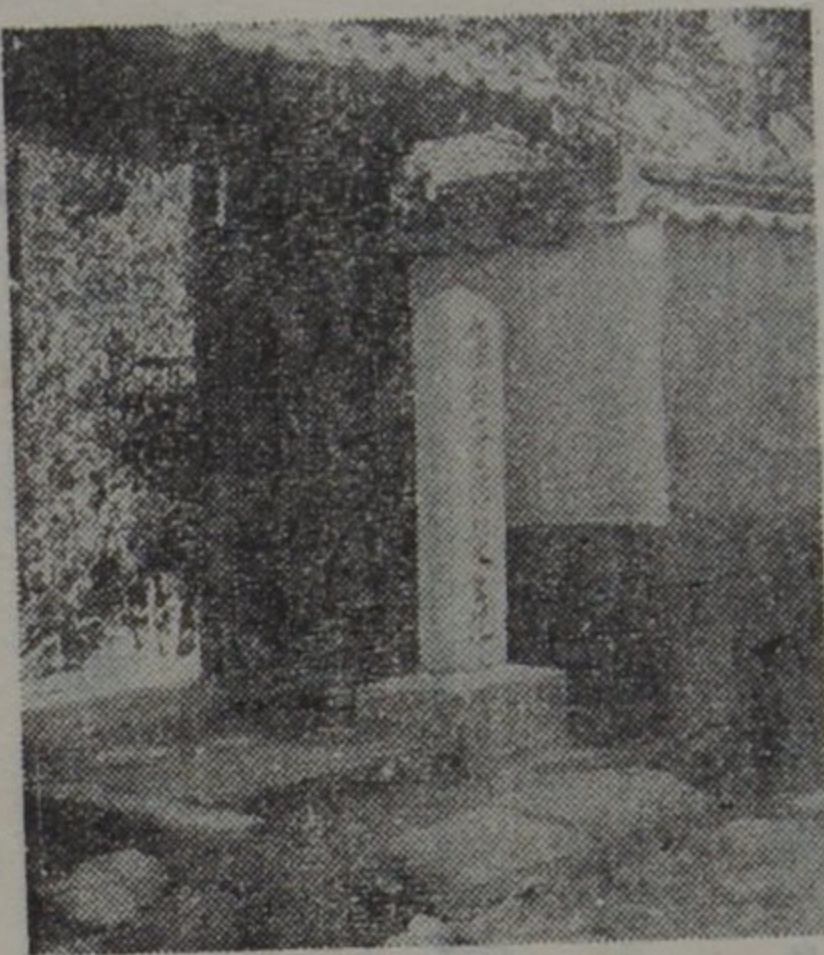
堀内ミ舊城下町ミの境界線が北の菊ヶ濱の附近から南の新堀川に達する片河町ミいふ町筋である。この町筋を西の境界とし、南は新堀川、東は戎町の手前までを境界としての區域内を昔は城東地方と呼び、今では市の區長組織に於て之を城東區ミ言つて居る。

この區域は今日では餘り殷賑でないが、舊藩時代では市中の目抜き町ミ言はるる吳服町を本通りミして、江戸屋、伊勢屋、菊屋といふやうな豪商素封が軒を並べて居り、南方へ江戸屋横丁、伊勢屋横

丁、菊屋横丁といふやうな横筋が通じて、其處が御城の出口を守衛する大切な侍町になつて居つた。今では彼の素封家の内でも菊屋家一軒が昔のまゝに存在して居るだけである。堀内から城東區への出口即ち昔の中の總門の門内に當る所に近頃男爵田中義一大將の銅像が出来て東面して立つて居るのは如何にも舊城内を音づれる來客を悦んで迎へるやうな面持である。此處を素水

園と呼ぶ。

高杉晋作誕生地



田中大將の銅像も斜に向ひ合せて西面して片河町に立つて居る銅像は片河町出身で、大阪堂島の豪商となつた男爵藤田傳三郎の銅像である。此の銅像のある所は今では香雪園と呼ばれ藤田の舊宅及び附近を取り擴げて小公園のやうなものにしてある。

菊屋横丁に田中大將の誕生地高杉晋作の誕生地がある。城東區の内新堀といふ所に法光院といふ眞言宗、古義派の寺があつて境内に金毘羅大權現の社があり、拜殿の楣間に廣き約半疊幅もあるやうな、大きな鼻高天狗の朱塗面が掲げてある。附近の幼兒に之を見せるに皆泣くを常にするのに、晋作の幼時に之を見せるに悦んで子守の背で躍り上つたさうである。

いつも晋作を負うて子守が外に出れば、背から手を伸べ天狗を見せに行けと其の方へ指を差したといふことである。

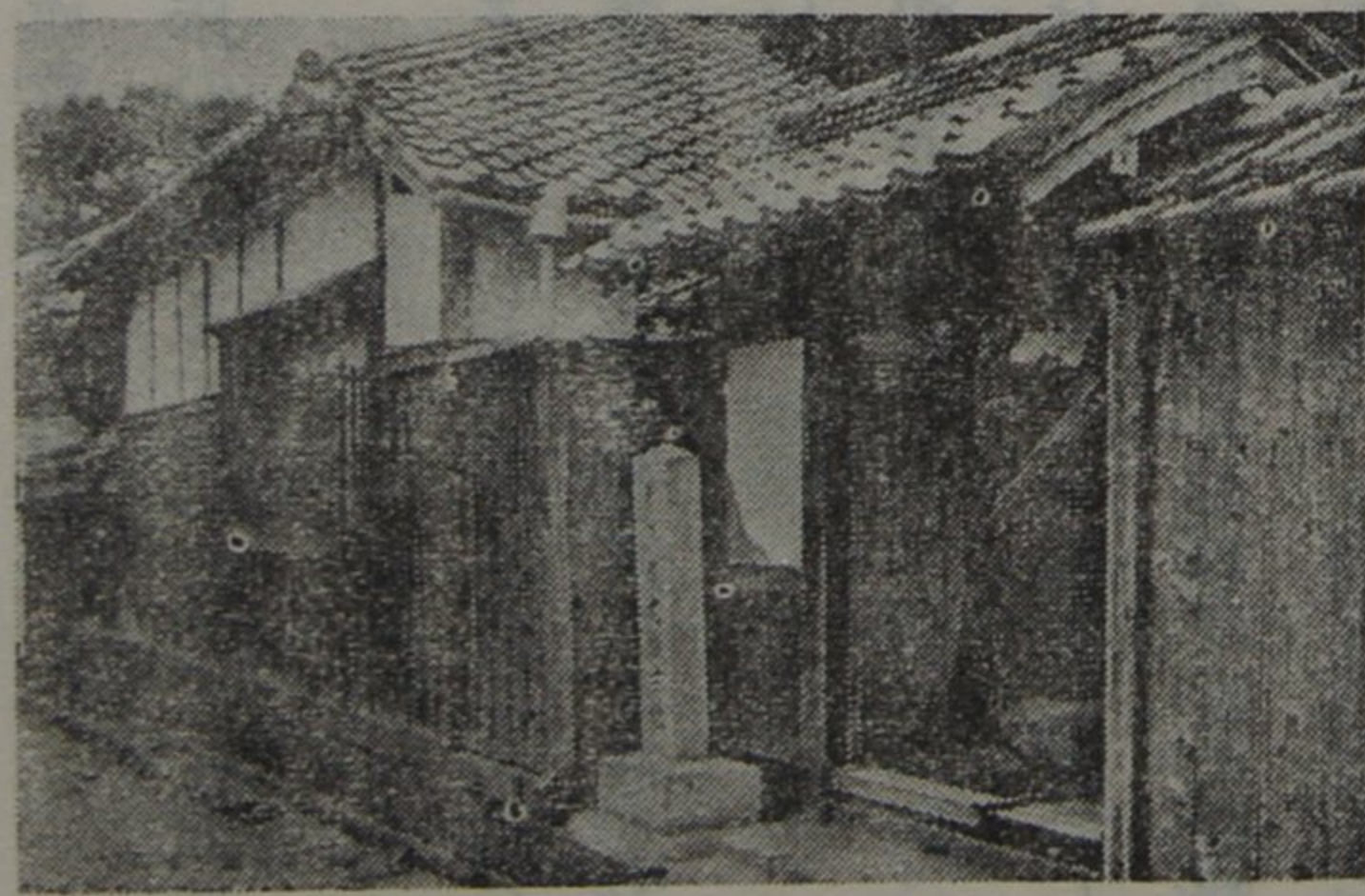
江戸屋横町に木戸孝允の誕生した舊宅が今も其のまゝ保存されて居る。家は孝允の生家和田家で、孝允の父は和田昌景といふ藩醫であつた。孝允の初端午の時の招客に昌景は、

長男小五郎の初端午を祝ひたいが、都合あつて鯉幟も立てぬ、武者人形も飾らぬ。幸に得た、ぐそくだけお目にかけるから何卒御越し下さう。

こいふやうな意味の案内状を出した。

客が行つて見るに酒肴の用意はしてあつて、直ちに馳走が出たが豫告の如く幟も、人形もないのである。

「御噂さのあつた具足こいふのは何れで御座る」と客たちは尋ねた。案内状に假名でぐそくを書いてあつたのを、客は皆鎧冑の具足のこいと考へて居



木戸孝允誕生地

つた。昌景は今お目にかける言つて笑つて居つた。

小五郎即ち孝允は天保四年六月二十六日の誕生であるので、翌年の初端午の時には、早や、満一歳に近いのであるから、表座敷の來客の賑かな聲を聞いて、勝手から表座敷へ這うて出た。

這うて出て見るに座敷は客と杯盤まで塞つて居るから、小五郎は、床の間の上に這ひ上つて正面に向き直つて來客に面して笑つた。之を見るや昌景は愉快けに言つた。

「あれが書中で御吹聴申した、ぐそく即ち愚息でござる。このぐそくが破れものであれば如何に、鯉幟や、武者人形を飾つてやつても主君の御役に立ち申すことは出來ぬ。幸に立派なぐそくであ

つたら、幟や人形がなくても立身出世は爲すこゝで御座らう。」

と言つたので來客一同は大に喝采したといふのが、孝允の初端午の祝宴であつた。

今若し法光院に詣でて晋作の稚孩の頃に悦んだ大天狗面を仰ぎ、今は市有となつて來觀者に開放しられて居る、元の和田屋敷を訪ひ孝允の初端午に坐り直つたさいふ床の間などを見らるれば實に史味津々たるものがあるであらう。單に自動車で一驅し去られては、こゝもそんな意義ある觀覽は出來るものでは無い。

晋作、孝允等と略々時を同じくして南片河町に孝女明石くにといふものが居つて、其の追表碑は新堀川に架した城東橋の側にあり。墓は附近の蓮池院にある。市立明倫小學校では毎年一月二十日のくに女の忌日に孝女會といふものを行つて、兒童等が皆孝女の墓に詣でて居り、城東婦人會では孝女の佛事や、墓の世話を引き受けて居る。

嗚呼今は寂れたる城東區の待町をさうして市店よ。されども忠臣孝子を出したる過去の歴史は決して消え去る時は無いのである。可憐のくに女は永く萩の名玉と歌はれて光を放ち、憂國の忠臣晋作、孝允等は、悠久に神の國日本を照すの明星となつて、輝いて居るでは無いか、嗚呼皇國に於て生むべきは忠孝の子である。教ゆべきは忠孝の道である。

### ○萩の明玉の歌

香川 幸舍

一、指月の山の明けがらす、 孝女孝女と呼ぶをきけ、

孝女明石名は阿くに、 父彌十郎母はもこ。

二、母は病の床にあり、 妹りんは飢に泣く、

幼き身にて唯獨り、 父を待つ夜のいみ長し。

三、何を仙崎けなげにも、  
 父のためには暖かき、  
 祇園の神にいのりつゝ、  
 甘粥などを商ひぬ。

四、母に孝養四十年、  
 彌陀來迎の西圓寺、  
 法の聲をもきかせんと、  
 負ひて詣でしこともあり。

五、硯の海に仇浪の、  
 女役はこれぞとて、  
 騒げる折は君のため、  
 兵糧方を助けけり。

六、眞萩の花はこの花ミ、  
 聞え上げたる雲の上、  
 殿より賞を賜はれば、  
 孝節録にのせ給ふ。

七、長き犠牲に衰へて、  
 よる年波は七十二、  
 養ひ呉れる子もあらず、  
 蓮池院にてうせにけり。

八、徳は孤ならず隣あり、  
 涙になりし追表碑、  
 數多の人の同情の、  
 明玉の碑と世にはいふ。

歌に歌はれて居る西圓寺は彼の北海の絶勝を以て聞えたる隣郡、大津郡の青海島大日比にある淨土宗門の一寺である。祇園は、青海島へ渡る手前の仙崎町にあつて夏祭りの盛んな神社である。くに女は

腰の立たぬ母を負ひ小商ひをする父を助けて、仙崎祇園の祭禮に毎年店を出しに行つたものである。硯の海の浪の騒ぎは彼の文久三年の下關の攘夷のことを言つたもの、孝女追表碑は大正八年十一月二十日に當時の明倫小學校尋常科第六學年の男女兒童の發起で、互に手分をして同窓會の先輩に説き、わざこ零細の金を集めて之を建てた兒童らしく尊い小碑である。

○城東區及附近案内一覽

名	稱	所	在	記	事	
孝	女	城	東	橋	脇	孝女明石くに記念碑あり(萩四孝子の一人) 目下藤田家
明	石	南	片	河	町	藤田傳三郎銅像あり
香	雪	北	片	河	町	香雪園向ふ角なり
三	浦	菊	屋	横	町	贈正四位 總理大臣
高	杉	全				參議、生家和田家
田	中	江	戸	屋	横	丁
木	戸	全				從四位、名醫
青	木	全				周彌の弟、名醫
青	木	全				
青	木	全				



青木周藏舊宅	法光院	慶安橋	好生館	蓮池院(淨土宗)	新獄址	端坊(眞宗)	多越天神社	土屋蕭海舊宅
全	新	全	全	田	戎	戎	峠	壘
所	堀	端	町	町	町	町	町	町
外務大臣	香川津二孝子參詣碑及び益田梅村の碑あり	慶安年中に架す	明倫館附屬の醫學所にて今は萩醫會會場	明石くに、賀屋恭安(名醫)、山田原欽(名儒)、岡本樓雲(教育者)の墓あり	明治九年の亂に前原一誠以下入獄せし所	有名なる蹄樓あり	村社、由緒の社	贈正五位

(十) 本筋通り

舊藩時代には御城の中總門から、城東區の吳服町より、瓦町、西田町、東田町を経て、唐樋町の札の辻(今の萩稅務署の處)より、御許町通り山口方面へ向ふのを萩往來の本筋とし、藩公初めての東上、又は初めての江戸よりの入國、若くは特に吉慶あつての出入には必ず此の筋に依られ、普通時の出入には、平安古總門より八丁筋へ出でられ、非常時又は凶事の出入には北の總門よりせられたものであ

る。而して濱崎港への本筋は東田町と西田町との境目から北に折れて熊谷町を通るのが一般であつたが今では吉田町通りから松本川の左岸に沿うて行くのが本筋のやうになつて居る。

熊谷町の方へ曲げて僅か七八間行くと左手に西本願寺の別院があつて、萩第一の巨刹である。此の寺は元と輝元公の夫人清光院殿の菩提寺で清光寺と呼ばれて居つたが、維新後に本願寺の有に歸し、今日では清光寺は向ひの小さい寺へ移つて居る。

別院の本門は藩學明倫館の本門であつた。同じく唐門は明倫館聖廟の門であつた。彼の明治九年の萩の亂、即ち前原一誠が兵を擧げた時に、明倫館を本陣に使つたものである。事平いで後に、こんな大きな建物を此のまゝで置くと、又た何時何者が之を悪用するかも知れぬといふので、縣に於て皆之を解除して競賣に附して仕舞つた。随つて斯様の明倫館由緒の建物類が市内所々に散在して居るのである。

雜賀下り筋へ北に向いて僅か行くに、右手に田北醫院があつて、其の後方に昔時光善寺といふ寺があつたのが今は寺は廢寺となり、墓地だけ残つて居る。此の墓地に有名な聞秀詩人原采蘋の墓がある。采蘋は豊後秋月の儒者原古處の女である。兄白圭が病弱で父の學を襲ぐに適せぬを悲み、我身を犠牲にして學問に耽り、遂に能く家學を興すに至り、詩は特に巧みで、門下に有名な詩人村上佛山が出て居

る。この頃福岡の閨秀詩人に龜井小琴があつて、世人往々采蘋を併せ稱し居るが、采蘋の詩はとて小琴なきの比でなく恐くは我國に於ける女流詩家の第一であらうと言はれて居る。斯くも有名な采蘋が年老いて安政六年六十二歳の春に、父の詩集を出版したいといふ念願で故郷を出でて、京阪地方に上つたが、書肆の應諾する所ならず。誠に失望して、家學の先輩山縣周南の墓が萩の保福寺にあるので、せめてそれに詣でて歸らうといふので、九月の頃萩に来て柿並樂山、土屋蕭海等と往來して居る内に、病に罹りて癒えず、十月二十日溘焉として蕭海の家に歿した。蕭海之を先塋の側に葬り、題して孝感齊女原采蘋墓として居るのが、即ち光善寺の墓である。嗚呼齊女の孝志斯くの如く、其の詩才は斯くの如く、秀でて國家文運の上に實に追慕に堪えざるの人であるに、空しく異境の鬼となりて、墳墓は苔徒らに蒸生し、寒蛩の外には、顧みて詣でるものもないのは又た人生の恨事ではないか。これ著者が此の篇に於て特に之を紹介する所以である。

采

蘋

九州第一の梅。今夜爲君開。欲知花眞意。三更踏月來。

(譯) 九州第一の梅、今夜君がために開く。花の眞意を知らんと欲せば、三更月を踏ん

で來れ。

東田町郵便局の横手から北に折れて行くこ、右手に常念寺といふ巨刹がある。建物の廣さに於ては、本願寺別院にも劣らぬと言はれ、この寺の本門は太閤秀吉の京都の聚樂第の裏門を徳川家康が解き拂ふ時に、輝元公が貰はれたものである。

常念寺の前を少しく北に進むと、左に舊藩時代の上牢の野山獄址があり、右に下牢の岩倉獄址がある。此の近邊は古萩と呼ばれて居り、此の町筋は以前は牢町といつて居つたが、今では常念寺筋と呼ばれ、兩獄で勤王の志士が多く刑死したからといふので、往々勤王町などと呼ぶものもある。

元來野山、岩倉は共に藩士の家であつたが、兩家の間に婦人問題から刃傷事件を生して、藩譴を蒙り、兩家は取りつぶされて、家屋敷は牢屋に充てられるやうになつた。

彼の吉田松陰は武士であるから上牢の野山獄に入れられ、松陰が下田踏海に行を共にした門人金子重輔は身分が低いから下牢に入れられた。由來松陰の門人に接するや、凡て諸友を呼びて、之を待つこと骨肉の如く、實に温情の濃かなるものがあつた。重輔は江戸獄に囚はれの身となつて居る頃から既に痢疾に罹り、濕瘡が足に出來て行歩する氣力もなかつた。安政元年冬萩に戻され岩倉獄に入れられて

から、病勢彌々重きを加へながらも、悲哉師弟は全く相見るを得なかつた。道路を隔し、野山獄の北房第一舎に居る松陰は一には重輔が苦痛のために節を折るやうなこころがあつては痛恨の至りであり、一には重輔を慰めるものは自分以外に無いと感じて、毎朝我が獄室の片隅で朝顔を洗うて後、朗々と詩吟を以て重輔に呼びかけたものであるが、就中安政二年正月四日には思友詩といふ長篇を作り、中に「澁生眞に吾が友」と言つて居る。澁生は重輔の變名、澁木生といふを用ひた。重輔は時宛も病危篤に赴いて居るので、辛うじて衣衾を正し、兩眼の涙流れて瀧の如く感銘拜謝して之を聞いたといふことである。正月十一日重輔遂に牢死するや、松陰慟哭して、是より我が副食の塩噌の料を節約して金百匹を拵えて之を重輔の父に贈つた。今日獄址に近い北古萩の保福寺墓地に重輔の墓があつて、吉田氏と刻んだ一對の花立が供へてあるのは、この松陰の金百匹で拵えたものである。抑も松陰等の師弟は國家聖天子に盡さんとして、生別、死別を兼ねるの間に身を投じながら、夢魂尙ほ相逐ひて之を思慕すること、實に斯くの如く深く且つ切なるものがあつた、今日兩獄址を左右に控えて訪ひ來るの人、若くは保福寺の墓前に地下憂國の聲を聞かば耿々の丹心自ら奮起せざらんとするも得べからざるものがあらう。

因みに一言する、萩の市街は築城の當時名臣益田牛庵が専ら町割を爲したものであるが、如何に本通の街衢でも、此方から彼方へ一線に直通せるものは無く、必ず何處かで聊か折れては又た進んで居る。これ一朝仇敵の攻め寄せた時に、市街戦をなすに便利であるといふこと、一には萩といふ所は西風と、北風との極めて強く吹く所である故に、之を吹き通させずに弱めて、行人の難澁を少くするといふことから出たものであると言ひ傳へられて居る。

唐樋町の一向宗派の三千坊は、新市街の吉田町に面した所にあるが有名な學僧下間安海師を出した寺で門下に前田慧雲、河名淳孝等の名僧がある。

東西田町、唐樋町は流石に萩市の中心だけあつて、小原呉服店、島屋呉服店、秩父屋呉服店、倉田呉服店、有治雜貨店、八木雜貨店、柳井雜貨店、津田藥店、柏木藥店、藤川書肆、白銀書肆、萩商品館等を始め幾多の商店が軒を並べて繁昌し、百十銀行支店、長周銀行支店、萩積善信用組合等の金融機關も總て此の區域に設けられて居る。風月堂、花月堂、松月堂の菓子味は往々にして本場を凌ぐに足るものをも拵えて居る。就中松月堂の名菓萩の月は秋の薄の人を招くやうに盛に客足を迎へて居るが東京へのお土産になつても決して耻かしくあらぬものである。

御許町永林寺は本尊が子安観音である所から、婦人の信仰齋ならず。安産の加護を祈るもの常に絶えない。古雅な堂塔や、朱塗の門が道に添ひて、特に人目を引いて居る。

橋本町は家並みの揃うた品格のある商業町であるが、珍しくもこの町から古來多くの孝子、篤行家を出して居るのは、他に稀なる町の光榮であると考へる。享保十七年に賞を受けた町人大谷彌左衛門、延享二年に賞を受けた町人河上屋權右衛門、天明七年に賞を受けた町人藤井藤兵衛、町人田村五左衛門、及び町人山本助右衛門の妻はん。天明七年に賞を受けた町人河上屋養松、町人長野源左衛門。寛政二年に賞を受けた町人前田源次郎は皆孝行者として藩公より表彰の榮を荷ひ、延享三年に賞を受けた町人堀彌左衛門は奇特者として、又た寛政三年に賞を受けた町人前田六右衛門の後家まはは貞節者として賞美を賜つて居るのは、店頭の商品飾りにも彌増して何ぞ美しい町内の飾りの花ではあるまいか。宜なる哉、長くも無い町筋ではあるが、見るからにキチンとして何ぞなく今でも風儀正しいやうな町の面影である。斯る多くの孝節特行の人の中にも、前田源次郎は僅か八歳の幼少の身にて賞を受け、前田まはは實に其の母親にて二十六歳の若後家を以て貞操正しく一子源次郎と相共に賞を受くるなまは、何ぞ美しい橋本の親子花ではあるまいか。随つて源次郎母子の事蹟は次の如く官版孝義録に

之を載せてあるのも有り難いことである。

○孝行者前田源次郎

孝義録

前田源次郎は萩城下の橋本町の商人なり。父は豆腐をちまたに賣りて、わびしきすぎはひなりしに、四年あなたより病みて床にのみ臥しければ、源次郎深く歎き、品々ある藥とだに聞けば兎角してすゝめけり。始め六ツばかりの頃より、父の物うれるに随ひて、ちまたをも馳せめぐりける程に、自ら商ひの道をも覚え、父の病みぬる後は、朝毎に數荷の川水を汲み運びて、豆腐を作り、暑さ寒さをもいとはず。日毎に賣りありきしかば、人も憐みて助くる者多かりき、近き邊の童部の稚遊びに誘へども更に随はず、父が久しき病の内、倦みたる様もなく、誠を盡して介抱せり、左る由領主に聞えて、寛政二年十二月褒美の米を與ふ。この年齢八歳なりき。斯くて父は次の年失せけるが哀みの様譬ふるに物なく、中陰の間の慎みも成長の者に等しかりけり。其の後兼て人に仕へ居し伯父の何某計らずも病に臥して、彼が家に養はれしを、かたの如く貧しき中にて、母子心を合せてまめやかに勞り、扱ひしこと、又も領主に聞えて、此の年の十一月褒美して米を與へ、母のましといひける者にも、過ぎ行きし夫に貞節を盡し、病める小舅をいたはり、子を教ふるの道あることを賞して米をさらせけり。

幼な身に親の心を汲みつゝも、  
運びにけりな阿武の川水。

○本筋通り及び附近案内

名	稱	所	在	記	事
法華寺	(法華宗)	米屋	町	清正公廟あり	
長壽寺	(浄土宗)	米屋	町	河上彌市墓碑、桂公爵家の墓あり、又切支丹史蹟としての墓地及び其の關係者熊谷家の墓あり	
廣雲寺	(浄土宗)	津守	町	佃西岸(畫人)の墓あり	
報恩寺	(浄土宗)	全	町	伊藤公爵家の墓あり	
原采藏墓		雜賀	下り	光善寺址にあり	
常念寺	(浄土宗)	五間	町	渡邊通(七騎落の際毛利元就公に代りて戦死者)の墓あり	
十一烈士殉難碑		野山獄	址	俗論派に殺されし政務員	
清風松		古萩門田家		村田清風の持歸りし東都高田馬場八幡社の五葉松	

備荒御米倉	吉田町字新藏	毛利吉元公の建つる所
青物市場	唐樋町	私設
小賣市場	吉田町	今萩稅務署のある所にて防長里程原標あり又重罪人の晒場、善行者表彰の揭示場あり
札辻跡	唐樋町	天神は舊佐世家の鎮守にて塲所は景勝に富む
佐世天神址	梅月亭の側	贈正四位
來島又兵衛舊宅	渡口相町	民政上の功勞者
阪時存舊宅址	溝部横町	長防臣民合議書其他多くの印刷出版をなしたる處
藏版局址	御許町	橋本橋の番所にて田中大將の父は永年此處に勤務せり
橋本大橋番所	富田旅館待合所	多くの孝子を出せり
孝子町	橋本町	

(十二)萩の教育と南區

目下萩市内にある公私立の中小學校教育及び社會教育の機關は、次の如き配置と箇所とに之を設けら

れて居る。

名	種別	所在	名	種別	所在
萩市立 明倫尋常高等小學校	公立	江向	萩市立 萩商業學校	公立	江向
萩市立 椿東尋常高等小學校	公立	松本	山口縣立 萩高等女學校	公立	江向
萩市立 越ヶ濱尋常高等小學校	公立	越ヶ濱	修善女學校	私立	田中
萩市立 椿西尋常高等小學校	公立	椿	双葉幼稚園	私立	熊谷町
萩市立 白水尋常高等小學校	公立	山田	山口縣立 萩圖書館	公立	堀内
萩市立 木間尋常高等小學校	公立	木間	萩市 教育會	私立	萩市内 役所内
山口縣立 萩中學校	公立	堀内			

萩中學校の敷地は舊藩大夫海北毛利氏の舊宅地であり、海北毛利氏は防長文學の發祥に由緒が深いことから、校内にその記念碑があり、又た校の運動場は大正十五年五月三十日攝政宮が阿武、美禰、大津三郡の學生及び男女青年を御親閱遊ばした所であるので其の記念碑が立つて居る。

萩高等女學校の敷地は舊藩毛利家の南園別邸の在つた所で、名君忠正公の居館であり、又た今の公爵

毛利元昭公の御誕生になつた所でもある。南園館といふ一棟は今も舊觀のまゝで、校内に保存されて居るが、誠に質素なものである。校内には又た嘗て舊藩時代に藥草園を設けられ、醫學所洋學所等が置かれて居つて、或は硝子製造、或は新醫藥製造等が行はれ、又た嘗ては養蠶をなし絹機を織らしめられたこともあつて、誠に學事に縁故の深い地である。



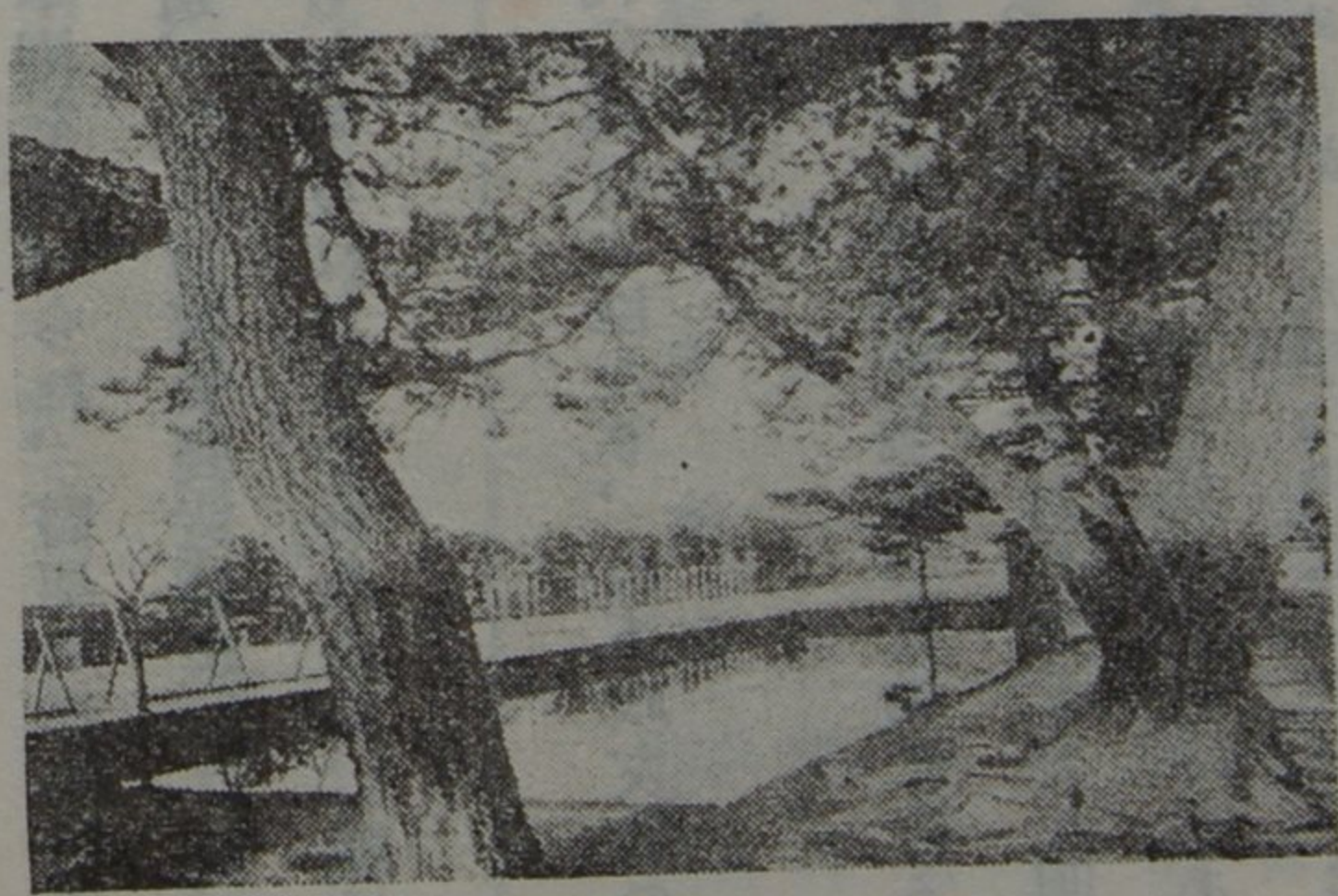
明倫有備館

双葉幼稚園は嘗て田中内閣時代の遞信大臣たり、目下政友會の重鎮たる久原房之助誕生の舊宅である。  
明倫小學校は萩商業學校と共に昔の藩學明倫館の古地にあるので多くの觀覽すべき材料がある。是より先き第八代吉元公が明倫館創建の場所は堀内の第三郭内にあつて、徳川氏全盛の時であるから、規模も諸侯の學たるに止めしめ、大學の設立は之を許さなかつた。

然るに第十六代敬親公の時に至り、彼の俊傑村田清風の建言に曰く、學校は出入不便な郭内なきに設

くべきものでない、誰でも四方から眺められるといふやうな廣場に建てるに、必しも就きて學ばずとも、之を眺めるだけでも人心を善導するものである。次は今や國歩艱難で大に人材を要する時であれば諸侯も大學校を興して國家のために人材を養成することに決して不都合は無いと言つた。忠正公之を嘉納し給ひて清風をして、新館を江向に建てしめ、世子元徳公の居館までも其の敷地内に建てしめられ、之を成美堂と呼ばれた。

斯くて教科書を一定するため所謂明倫館本と稱する改訂新刻の無註、孝經、四書、五經を發行、武藝には面小手の劍道仕合より、心膽練磨武者修行等の方法まで確立し、館内には水練池まで設けられたのが今も残つて居つて、我國に於ける最古のプール（或は世界に於ける最古のプール）として内務省から大切な史蹟天然記念物として保管されて居る。



明倫水練池

斯くて又た館内には卒族の稽古場やら、小學舎まで設けてあつて、盛んに人材を養成したものである。

から、後に松陰が松下村塾を開くや、明倫館に於て文武の實力を養つて貰つた子弟は松陰から思想を興へて貰つて、爰に其の器を大成し、國家の用を爲すに至つた。木戸孝允、高杉晋作、久坂玄瑞やら山田顯義、前原一誠以下の多くの名士が即ちそれである。

萩の主要學館が江向地方にあるこゝに因んで、其の附近の平安古、河添、河岸端<sup>カシバタ</sup>地方までを籠めて假に之を川内の南區と名づけ、以てこれが案内を爲して見たい。

萩市役所の前から玉江橋を渡つて玉江驛に到るまで、大正年中に新設の坦々たる縣道が通じて居る。

其の平安古本町を交叉する地點附近に故文部大臣柴田家門の舊宅、名士の久坂玄瑞の舊宅、村田清風の舊宅等があつて、家門の舊宅には今は平安古區の公會堂が出来て居る。

村田清風は幕末に當つて何と言つても長州第一流の偉人であり、名臣であり、功勞者であつて、此の人無くば決して後の活動せる長州も無く、人物も出でなかつたであらうと思ふ。例へば吉田松陰が十三歳の時に清風を訪問するに、清風は何と思つたか、散々に不待遇なこゝをして歸らしめた。斯くて中村九郎といふ部下に向つて

「此の間吉田の若先生が來たから、わざと不待遇で歸らしめたが何と言ふて居るか」

聞いた。中村は答へて

「村田の老爺の所へは再び行つてやりはせぬ、糞ツ腹が立つ」

と言つて居るそうなき言ふを、清風は聞いて、

「それは感心なこゝだ、今日防長の政治を一手に握つて居る自分のこゝを誰一人でも彼是言ひ得る

ものは無いのに、矢張見込のある人物だと思つた自分の見當は違つて居らぬ。君から言ひ傳へて

呉れよ、もう一度來たら本當の引受けをする」

と傳言するのだと言つた、松陰はそれを聞いて又た感謝した、

「流石に清風は偉い、僅か十三歳の我等の及ぶ所でない」

と言つて、改めて清風を訪問すると、清風は我が孫でもある位の幼年の松陰を坐に請じて、明倫館軍學の師家といふ格に對して立派な待遇をなし、偕て告げて言ふやう、

「若先生はこんな狭い萩のやうな所で朽ちる氣では駄目である。それには成るべく四峠の外に踏み出して、天下の形勢を察し、遠く目を世界の隅にまでも配つて外夷の動靜を見て、大に天下を率ゐる國家を泰山の安きに置くの先達<sup>センダツ</sup>たらねばならぬ。」

松陰は深く感奮興起して意を決する所があつたと言はれて居る。後に松陰が海外の形勢につき大に佐久間象山の指導を受けたといふが、松陰が四方に志すこゝは決して佐久間を須つて後に起つたものではない。

○教訓十二吟

村田清風

一、治不<sub>レ</sub>忘<sub>レ</sub>亂

治まれる春に柳の亂れかな。

二、孟母移<sub>レ</sub>居

子を思ふ鶴は初日の松の上。

三、食は命の本

其の汗の米となるのは田草取。

四、行貴<sub>ニ</sub>清潔<sub>一</sub>

泥水を抜出て蓮の清さかな。

五、農事辛苦



露霜こなる曉、老の刈田かな。

六、陰 德

人知らず積むや陰徳夜の雪。

七、國 恩

草も木も育つ恵や春の雨。

八、心有憐

岩角を花や包みて咲ふ嶂。

九、事察機微

鉢植の松から聴くや秋の風。

一〇、陶侃務事

分陰を惜むもあるに午睡かな。

一一、貯 穀

蝗刺す禽さへ冬の手當かな。

一二、事有本末

北窓をふさいで後のこたつ哉。

○川内南區案内一覽

名	稱	所	在	記	事
明倫新館	址	江	向	今の明倫小學校、萩商業學校、萩區裁判所の區域にて裁判所の前庭には今尙ほ練兵場の碑あり	
德隣寺	(臨濟宗)	江	向	林良輔(贈從四位)、名儒繁澤豐城、薙刀武藝者香川景虎、弓術名士粟屋衛藏の墓あり	
永富鳳白砂糖製造地		水大寧寺宿坊		我國の初めての白砂糖製造場	
杉孫七郎誕生地		若松屋筋		子爵	
近藤芳樹舊宅		竹丹波横町		國學者	
南園館	址	縣立高等女學校		舊藩主別邸、藥草園、醫學所等ありたり	
舊勘場	址	元阿武郡役所址		當島宰判の政務所	
中村雪樹舊宅	址	德隣寺後藍場川筋		贈從四位	
敬身堂	址	船廻		卒族の學館	

精鍊場跡	佐久間佐兵衛舊宅	久阪玄機誕生地	村田清風舊宅	久阪玄瑞誕生地	曾根荒助舊宅地	桂太郎誕生地	毛利登人誕生地	寺島忠三郎誕生地	浦鞆負舊宅	安戸左馬之介舊宅	山口素臣誕生地
水車筋	石屋町	全行寺筋	平安古本町	八平安古本町	平安古本町	中渡し	河添開作	平安古	平安古	河添	
水車跡残り	贈正四位	贈正五位	贈正四位	贈正四位	朝鮮統監	總理大臣	贈正四位	贈正四位	贈正四位	贈正四位	陸軍大將子爵

(十三) 川島、土原、浮島

松本川の左岸、即ち萩の東郊に相對する區域は上流の方から之を計へて、川島、土原なる。主として舊藩士の居住して居つた所で、今でも萩では一番引き締つた區域である。大臣級では桂太郎、白根

專介、野村靖、武官には大將山縣有朋、中將鳥尾小彌太等及び韓國統監曾根荒助やら、參議前原一誠やら、名士長井雅樂やら、入江九一等多くの人材を輩出した所である。川島も土原も區として今日は立派な公會堂も持つて居つて、川島戸主會、川島婦人會の成績などは萩に於て尤も模範的である。浮島は土原區に屬して一名弘法島とも稱する川中の島であるが、昔弘法大師が唐から歸朝の時に船を



山縣公銅像

寄せて、初めて我國に眞言の宗旨を説かれたといふ傳説地である。随つて寄船山弘法寺といふ伽藍のある淨境で、松籟は看經の聲に通ひ禽鳥は振鈴の聲に和する。川を隔て、眼前に東萩驛があり、上流から下り來る川舟や筏が、誠に畫趣を添えて、夏の苦熱を忘れしめ、旅塵を拂ふことなごに

は尤も宜しい靈地である。

境内に鎮守の辨天社があり、舊藩時代の振武隊の官祭招魂場があり、名儒仲煥文の碑、書家和田梅翁、名醫佐々部玄庵の墓などがあり。有名な前原一誠、佐世一清兄弟の墓並に一誠の妻として賢夫人の名高く、能く一誠の難後の家道を支持して家格を落さなかつた綾子刀自の墓も此處にあり、小倉花香女

史其の他俳諧の句塚、句碑等も境内にあつて、自ら靈域をなして居るのみならず、高野山の納骨に倣ひて、萩の他の寺院には見るを得ぬ高い納骨塔もあつて、信仰上からは非に參詣して宜しき所であるのみならず、寺側には廣潤なる蔬菜園が幾十畝の遠きに連なつて居つて、新式の温床栽培の開けぬ藩政の頃から胡瓜、茄子等の早期栽培を行つて来て、今日でも大に新鮮なる野菜を市中に供給して居る。之を耕作する家が附近の渡り口、新橋といふやうな所に數十戸あつて、就きて農事を問へば、大に視察員を益するものがある等頗る多くの土産話を此處で集めるこゝが出来る。三月二十一日と、八月二十一日の大師の忌日には參詣者が多くて大に賑ふのである。

◎弘法寺縁起 (抄出)

抑も當山の舊記を閲するに、高祖弘法大師求法入唐の歸途、船日域の雲霞を認むるの時、一老翁の小舟に乘じ、大師の船を訪ひて謂へらく、我に宿願あり。老が島に寄宿されんこゝを請ふ。大師請に應じて行く。一小島あり。上陸す。忽ちにして老翁を失ふ。忽ちにして又た天女あり。法縁結宿の尊容を止められんこゝを請ふ。大師即ち自体の軀を石に刻す。これ即ち本山の本尊なり。惟ふに老翁は地主辨才天の化現にして、島を浮島又た弘法島と呼び、因て寄船山と號す。法

燈靈應の靈地なり。

此處を浮島と呼ぶは、昔はこの島は海漚の上に浮いて居つた。潮満つるも、汐退くも常に、波に伴ひて上下し、岸邊には決して干満の差がなく。更に阿武川の洪水にも、河水が溢れて島を浸すやうなことは無かつたと言ひ傳へて居る。今日では必しも左様でないが、是は敢て法燈の變化でなく、天變地異の結果とでもいふものであらうか。趣味傳説の一つとして聞くべきものである。

辭世

佐々部玄庵

父母に呼ばれて假の客に来て、

もとの住家へ歸る夕暮。

辭世

なけば淋し、なかねば猶も閑古鳥  
萩に花のさく時來るも來たものよ  
鳴呼花のちるや閑かのある限り

花 香  
一 如  
成 青

○川島、土原、浮島案内一覽

名	稱	所	在	記	事
山縣有朋公爵舊宅		川島堤元明神社隣		總理大臣、元帥、銅像あり	
山縣伊三郎誕生地		勝家		遞信大臣	
善福寺(臨濟宗)		川島		山號指月山、元指月山にありし名刹	
桂太郎公爵舊宅		溝川		附近に甘棠園あり	
鳥尾小彌太舊宅地		滑川	筋田	陸軍中將	
廣澤兵助誕生地		十日市	筋	參議	
杉山松助舊宅地		小橋	筋	贈從四位	
香川平助舊宅		小橋	筋	贈正五位	
玉木直人戦死地		小橋	筋	前原騷動の時、乃木將軍の實弟	
奧平謙輔誕生地		梨木	町	贈從五位	
白根專助誕生地		全		遞信大臣	
兼常清佐誕生地		全		文學博士	
入江九一誕生地		全		贈正四位	
野村靖子爵誕生地		全		內務大臣	
周布政之助舊宅		全		贈正四位	

カレバニ電池にて火薬爆發實驗地	扇の芝	維新前に小野爲八之を行へり
長井雅樂舊宅	山中町	名士
前原一誠舊宅	江中後	贈從四位
檜崎彌八郎誕生地	馬場	贈正四位
山縣周南舊宅地	濱ン坊	贈從四位
弘法寺(眞言宗)	浮島	名刹、又た勝區、境内に招魂場及び前原一誠以下名士の墓あり、附近は有名なる弘法寺農場なり

(十三) 北區と小畑、越ヶ濱

弘法島から、直ちに小畑越ヶ濱方面へ向ふことを暫く待ち合せ、萩越ヶ濱間の乗り合ひ自動車に一便後れることにして北區即ち、北古萩から濱崎方面を一巡して見たい。北古萩は萩の寺町で亨徳寺、海潮寺、本行寺、妙蓮寺以下多くの寺院が此處にある。就中海潮寺は曹洞宗總持寺派に於て全國的に有力な淨園であり、本尊千手觀音は佛師定朝の名作にして、慶長年間に不見妙見大和尚の草創である。明治維新後に祝融の災に罹つた折しも、藩學明倫館の競賣に際し、孔子堂即ち聖廟を購ひ來つて此處

の本堂にしたものである。されば此の寺の本堂は昔の明倫館の聖廟を其のまゝであるから、一層敬仰追懐の念を深からしめ、棟瓦に今も聖廟といふ字が見えて居るのを見落されてはならぬ。

亨徳寺も亦た曹洞宗の巨刹で、亨徳年間に石屋天雄賢東和尚の草創といふから、海潮寺よりも創立は遙に古いのである。慶安火災後に又た度々火災に逢ひ舊記の存せぬを遺憾とするが、寺に達磨堂があつて椿村の住人袋求淨人といふ名佛師の作つた身丈け八尺の達磨像が安置してあるので萩案内上の名物となつて居る。この寺の下寺の墓地に有名な瀧鶴臺に配竹子夫人の墓があり、又た吉田松陰の兵學の師で併せて講名の名高い林百非の墓や前原一誠の弟山田穎太郎の墓も此處にある。

妙蓮寺、本行寺は共に日蓮宗で、米屋町の法華寺と共に萩の法華信者の二道場であり、何時もあの元氣のよい題目連唱の聲と日蓮太鼓の躍々たる音とが聞えて居る所である。就中法華寺の清正公の廟と、本行寺の稻荷とには諸方から信者の來り詣づること晝夜絶えぬの盛況にある。

濱崎の住吉神社は萩五社の隨一で承應年間濱崎の町人北國問屋の松田忠兵衛が浪華へ登らんとして海路播州沖を過ぐる頃、俄に暴風吹き起り逆浪天に漲りて船將に顛らんとする折に、泉州堺の住吉明神に祈つて沈没の難を免れた。乃ち海上安全保護の神として之を祭つたことから起つて、船頭漁民の崇

敬特に厚く、舊藩主東上の際にも屢々海上安全を祈り給ふのみならず、藩の濱崎水軍の守護神として厚き崇敬を寄せ給ひ、祭禮には濱崎六區内を世話役とし、萩の諸町をして年次を追ひて順廻しに特別の町飾りをなさしめ、之を名けて住吉町といひ、凡て萩の總祭りといふ制を定められたので、今日でもこの慣例に遵ひて、彼の金谷天神祭と共に、極めて殷かな夏祭りの行はれるのを以て、廣く防長の名物となつて居る。就中祭禮の際に神輿に供奉するの御舟は昔の毛利氏の三田尻水軍の總大將即ち殿様の御座舟に擬して之を作りたる大戦艦の模型で、古雅なる數本の戦旗を翻し、船頭舳子の代りに紋付袴の武者姿の若者十餘名がこれに乗り、陣螺を吹き、太鼓、三味線の滋味十分なる合奏に朗々と船歌を誦ひつゝ、エイ、エイ、オウの藩祖元就公嚴島合戦の時の勝利の勝鬨に由来を引きたる掛聲勇ましく、數十の曳子が大繩を以て之を曳き行く有様は勇壯雅麗天下に比なく、誠に昔の雄大であつた防長水軍の面影を傳ふる所、之を例の金谷天神祭の時の陸備への大名行列と相並べて、水陸兩軍天下に飛躍した防長軍の光彩陸離たる名高い行列であることを特に紹介する。

社頭を辭して、濱崎の魚市場を見る、濱崎の魚市場は古來有名なもので、濱崎地方の生氣潑瀾たる氣分をも併せてこの市場の競り聲に見せて居る。今日朝鮮に於て彼の地の水産業を支配して居る釜山、

京城等の魚市場の中心人物は殆ど凡てこの濱崎魚市場組から出たものであり、朝鮮の水産の大都市木浦の開創も全く此處の者が行つて露拂ひをしたのに起因する。

附近に市營の製氷所があり、又た齋藤鐵器製造所があるのを一覽し、東濱崎の御船倉の史跡を觀て行かねばならぬ。この船倉附近は今埋立てられたが舊藩時代に濱崎水軍の艤舟の所で船倉には總大將たる藩公の大型御座船と水軍指揮の主將の乗艦との二つだけは陸へ引き上げて藏め來つた所で疊み石を以て築き上げた大石倉である。無論舊藩時代の三百諸侯中に三百年間水軍を有して居つたのは毛利氏以外に無いから、斯る船倉が外に天下に有らう筈も無い。誠に日本の寶であるとして、史蹟天然記念物に指定しられて居る。

○萩住吉神社船歌

目出たの又のエンヨホホンホン／＼ホ、若枝は／＼／＼も、エヨエエンコノ／＼／＼エ、さかハ、ゆる、ノンヨホ／＼／＼ホホ、ハハ、はも、ホ、ホ、ホ、ン、茂る。

○神鈴のひゞき (抄)

大村武一

遠き祖公の勝鬨はエーエーエーにオーオーオー、扇は高くひるがへる。これに和唱の武將たちエーエーエーにオーオーオー。靜かに下るエーエーエー、續いて合すエーエーエー。意味を知つて知らずにか。エイコノ、コノ、コノ、エホオホエ。

○防長軍

香川幸舍

指月山みねの松風、菊ヶ濱。

なみの音にもかちどきの聲。

雁島橋を渡り、香川津に於ては裏道の姥倉運河の岸に沿うて歩みを運ぶが宜しい。嘗て天保七年申歳の秋市中の大洪水に藩主忠正公猶ほ一公子たるに過ぎざるの身分にて南園御殿に居給ひし時、溢れ來る水は既に殿中を浸して、二階も將に危険ならんとするに至つたので、公は二階の窓から船に乗つて難をお避けになつたことがある。時に公御年十八。思慮既に定まつて居られたので、左右を顧みて、「我若し封を襲ぐの事ありたらば、何さかしてこの市民の危難を救うてやらねばならぬ。」

と言はれたことがある。翌年幸にも封を襲ぎ給ひ、嘉永六年二月七日前言を履んで姥倉堀割の工事を起され安政二年四月十八日竣成を見るに至つた。人力三十一萬人役を費し開鑿運河の長さ四百

九十九間、幅十五間、爾來萩は再び水害を蒙ることなきのみか小畑灣と松本川口の河港を連絡して、船舶航行上の便利極めて多く、以て萩港の價值を幾倍にか増加することが出来たのである。



月十一日に二孝子祭を営んで居る。

運河の口に長添山が横臥して居る。山上には干城隊、第一大隊、第四大隊の殉難戦歿者の官祭招魂場があり、山下には萩の四孝子の一なる権藏利吉の誕生の家を表彰碑がある。二孝子は其の母病みて湯薬も効なく、死に瀕して居るのを悲み、共に新堀の金比羅社に冥助を祈りて、裸身参詣七日に及んだが、恰も満願の日に大風雪で、歸路遂に松水の岸に凍死した。時に権藏年二十二。利吉年十六であつた。實に文化十三年十二月十一日である。藩主齊胤公之を聞き、二人の志を憐み、碑を建てて之を追表し、資を賜ひて、永年祭祀の料に充てしめられたので、時の畔頭が以て田地を購うて置いたのを、今に相傳へて毎年香川津區では今も十二

香川津なる二孝子がこゝをききて感泣の餘りに

澤三位宣嘉

はらからの屍を雪に埋みてそ、

埋れぬ名は世に残りける。

二孝子の墓は小畑白山権現の後山にある墓地に立ててあつて、汽車の車窓からでも之を見ることが出来る。

○権藏利吉

香川幸舍

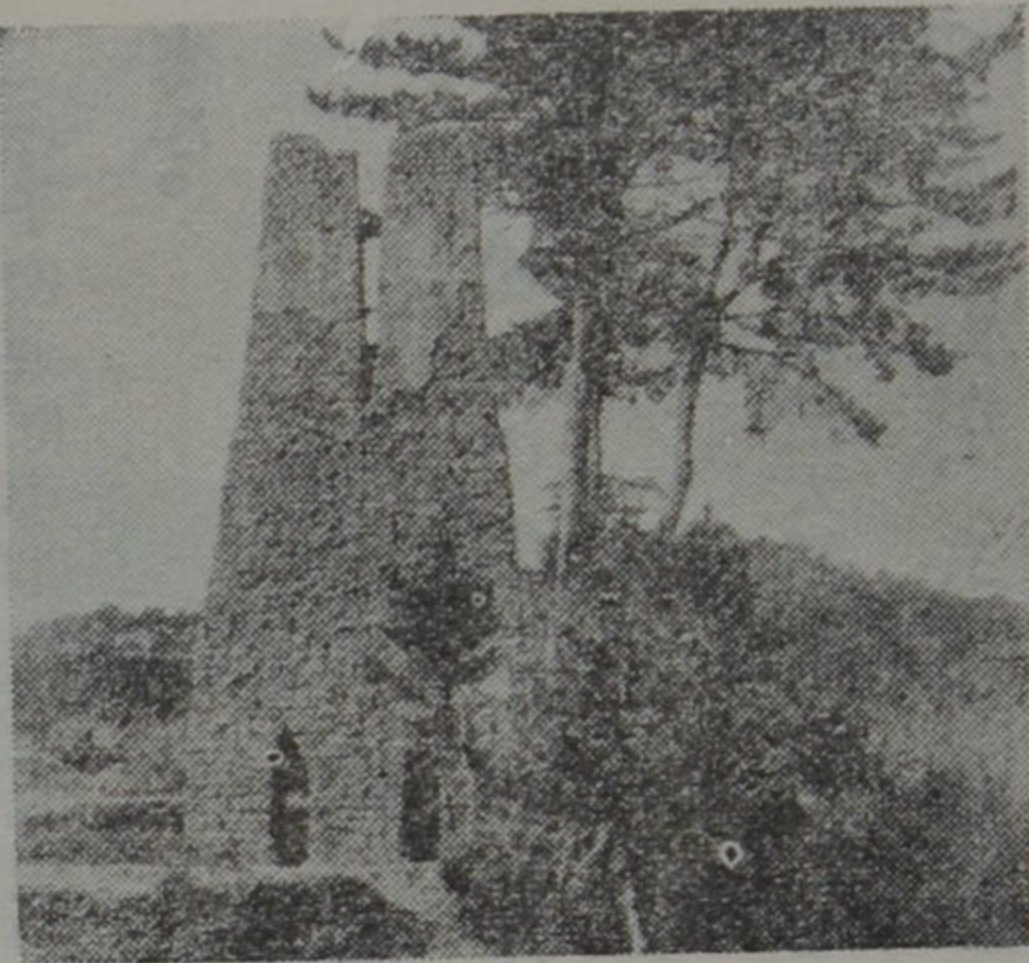
松本の雪の川邊にはらからの、

あとをのこせる人の子の道。

前小畑に史蹟天然記念物として指定された反射爐の遺跡がある。反射爐即ち熔鑛爐は今や完全には残つて居らぬが、玄武岩及び珍しい當時の鍊瓦を以て築き上げた二本の煙筒は幸に今も舊態を存して居る。世には長藩攘夷の大砲を此處で鑄たさいふものもあるが、それはさうであらうか。大砲は主として沖原の鑄造方で鑄られて居るこゝ、前も言つた通りである。

最初に三田尻の醫に田原養哲といふものがあつて、彼の萩の南園邸内の醫學所の教官となつたが、養

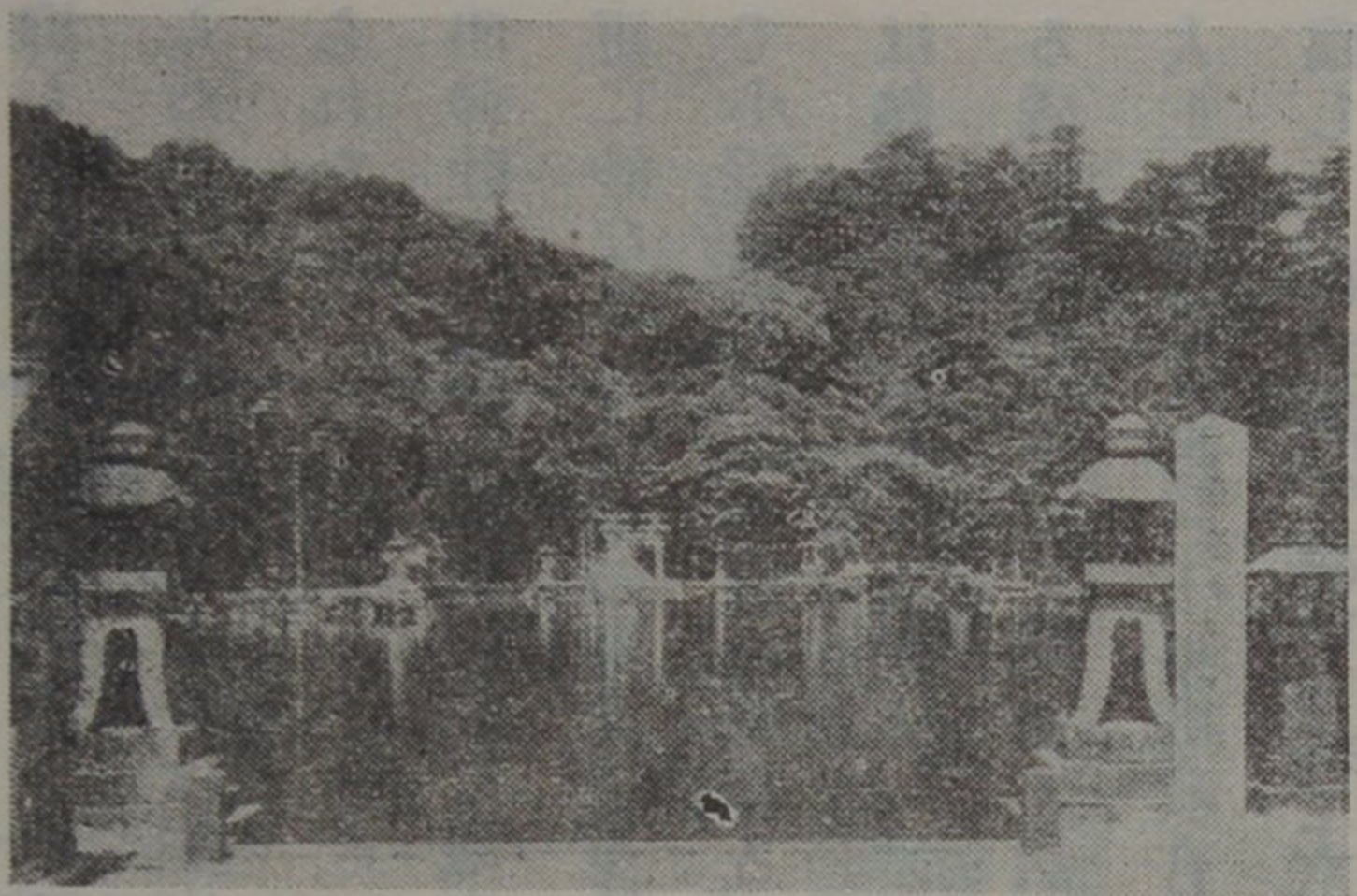
哲製藥の術に心を寄せ、小畑の陶器窯の火力を借りて鑛石を熔かし、新藥を作らんこし、此處に反射爐を設け、當時専ら和蘭からの輸入品になつて居つた、重炭酸曹達其の他の新藥を我國に於て始めて此處で製造したといふのが此處の反射爐の起りである。



反 射 爐

安政三年五月藩に於て此處の對岸の狐島の戎鼻に木造軍艦丙辰丸の建造を始めることがあつた。此の時に軍艦用の銃具を鑄造する必要が生じたので、養哲の反射爐を藩營として規模を擴張し、必要の艦用具を鑄造した。其の後安政六年六月に庚申丸の建造を始めた時にも、艦具を此處で鑄造した。

慶應二年に幕府無名の師を起して、再び長州を征するに及び、兩國の民其の暴舉を憤慨して、干才を取つて戰陣に赴くもの老幼無慮六十大隊の多きに及んだ。然るに多くは自分に所有の武器なきを以て、藩では阿武郡の須佐三、隣藩の廣島とから、刀匠を招いて、此處で俄かに刀劍を鑄造せしめ、之を白鞘に仕立てて人別一本宛を渡して出陣せしめられたものである。嘗ては又此處で硝子を製造したこゝもある。



越 ヶ 濱 明 神 池

是から越ヶ濱までの長汀曲浦は特に夏季の遊覽に適し天然の生簀もあつて、客に生鮮を饗するの準備もあるが、元來名越臺は沖の離れ島であつた。それが多分笠山噴火の際に地方と連なるに至つて名越半島となつたものに相違ない。而して其の頸部に當る所に越ヶ濱部落があつて、井戸を掘つても淡水を得られないので、遠方まで之を汲みに行くため誠に難儀をして居つた。

吉田松陰の兄、杉民治が當島濱崎の代官たるに及び、竹筧陶管を連ねて簡易水道を作り、毛利元徳公から休勞泉といふ名を賜はつたこゝがある、この水道を改善して、今では此處に立派な新式の簡易水道が早くから出來て居る。

明神池は池底の熔岩が細碎して空所を地底に生じ、地面が陥落した窪みへ、海水が空隙の毛細管引力によりて吸ひ込まれて、池水となるに至つたもので、池水に潮汐の干満あるこゝも外海の如くであるが、外海に後ること約二十三分間である。漁民が明神に冥助を祈



つて漁獲の初魚をこの池に放生することが此の地の風となつて、無数の海魚が池中に遊泳して、天然の水族館をなして居る。

抑も萩城の鬼門は寅の方であつて、越ヶ濱がそれに當る。之を威壓するには反對の支を以てせねばならぬといふ説に本づき昔は笠山に猿が飼うてあつた。綱廣公の時に更に嚴島明神を祭つて固めを加へられた。

明神社の左脇の叢樹の間に風穴がある。夏猶ほ寒くして、炎暑の候に海魚を貯ふる所に用ひられる。更に妙なるは笠山の海上三里餘尾島と相島との間に、彼の日本海中を流るる暖流の對馬海流が分岐して小暖流を西から東へ流れさせて居るので笠山が自ら寒熱兩帶の影響を受けることになつて、山中には熱帯性の植物十九種と、寒帯性植物二種を持つて居り又た多くの自生の橋があつて、我國に於ける橋の北限地として聞えて居る。

大正十四年五月三十日攝政宮萩に行啓の際特に越濱に行啓して、池魚に餌を與へ給ひ、親しく笠山に登臨して、御造詣の深い博物上の御知識を以て此の山の珍奇植物につきて御研究を賜はる所があつた。里民歡喜して、山上の御野立の材料を乞ひ得て記念に明神池の側の丘上に戎祠を造營して奉養して居る。

○水郷の萩 (抄出)

大村 武一

小畑の磯の浦づたひ、沖を遙かに見渡せば、何處焦れて漕がれ行く、身は白波の仇枕、右に立ちたる反射爐は、昔のままの日を浴びて、戎か鼻の鮑取り、若き血潮に燃えたる、子等の獲物の數々に父のほほえむ戎顔。渚に寄する藻鹽草、かき集めては後の世に、語り傳ふる馬の鞍、思案に暮れて、暮相の猿の聲に物思ふ、身にも越え行く越ヶ濱、水汲む乙女今むかし、笹舟囀して進みゆく、右手に見ゆる笠山のかげにぞ通ふ濱千鳥。愛のことづて相島の、姿いづこか遙かなる、見島は見えず。妹の待つ大島近く櫃島や、羽島尾島の波がくれ、深く千代をば契るらん

笠山珍植物表	
寒帯性	熱帯性
コ タ ニ ワ タ リ	イ ワ タ イ ゲ キ
シ	ハ マ セ ン ダ ン
バ	タ マ シ ダ
ナ	フ ウ タ ウ カ ヅ ラ
	カ ク ワ ツ ガ ユ
	ツ ク シ メ ナ モ ミ
	ハ マ
	ホ ウ
	タ チ バ ナ
	ホ ル ト ノ キ
	サ カ キ カ ヅ ラ
	ク ル マ バ ア カ ネ
	カ ギ カ ヅ ラ
	タ イ ミ ン タ チ バ ナ
	ダ ル マ ギ ク
	ハ ス ノ ハ カ ヅ ラ
	ハ マ ナ タ マ メ

○北區及び鶴江臺案内一覽

名	稱	所	在	記	事
亨德寺	莊	北	古萩	瀧鶴臺夫妻、林百非、山田穎太郎の墓あり	
妙蓮寺	(法華宗)	全		中村雪樹(贈正四位)、中村淳(萩町治功勞者)の墓あり	
海潮寺	(曹洞宗)	全		桂路祐(英學教授功勞者)の墓あり	
保福寺		全		金子重輔(贈正五位)山縣周南(名儒贈從四位)山縣太華(名儒)の墓あり	
本行	事	全		來原良藏(贈從四位)、有吉高陽(儒)有吉双林(伊語)の墓あり	
星	場	全		舊、射的(弓)及び射擊(小銃)の的場ありし所なり	
久原房之助	舊宅			遞信大臣	
東條英庵	舊宅	星	場角	名醫にて蘭學者	
泉流寺	(眞宗)	濱崎新町	上ノ丁	杉山松介(贈從四位)中村牛莊(名儒)の墓あり	
森重曾門墓		全		常念寺莊にあり、三島水軍神器陣大家	
作間鴻東誕生地		全		三典歌作家	
笠井順八誕生地		全		小野田セメント會社創設者	

妙元寺	舊宅	全	下ノ丁	中所可乘(儒僧)の墓、神及塾址あり	
中島聿		全		洋學者、贈正五位	
住吉神社		全		模型ながらも初めて我國に於ける汽車を走らせたもの(安政年間)	
朋來舎		濱崎	後町	縣社	
濱崎魚市場		濱崎本町		我國にて初めての公立小學舎	
御船藏		濱崎かんぬきの内		北海鮮魚の大に集るを以て名あり	
鶴江		濱崎對岸		内務省の保存史跡	
神明社		鶴江		模式的火山臺にて遠洋漁業に名ある鶴江部落及び臺上廣き畑地あり	
鶴江臺		音聲寺址後方		天照大神豐受大神を祭る	
燈籠臺		鶴江臺音聲寺鼻		萩を北方より見下すに唯一絶勝の地	
鶴江臺渡し場		魚市場前、税關前 香川津渡しの三所あり		攘夷大砲を据えし處	
				毛利吉元公創設の港口燈明堂	
				市營にて無賃渡しなり	

○雁島、香川津、小畑、越ヶ濱案内一覽

名	稱	所	在	記	事
二孝子凍死場所	雁島	香川津	島	東萩驛より出でたる衝き當り河岸附近 新川通りにより	
二孝子開鑿碑	全	香川津	島	香川津渡し場の側にあり	
姥倉運河開鑿碑	前	小畑		長添山の麓にあり	
二孝子舊宅	前	小畑		吉賀氏の工場及び販賣所	
泉流山竈元	中	小畑		内務省の保存史蹟	
反射山竈	中	小畑		戎鼻は舊藩時代軍艦建造地	
中狐島臺	中	小畑		石碑用の石材名産地	
夕潮港	越ヶ濱	小畑		内港	
嫁泣池	全	小畑		外港	
明神燔	全	小畑		内務省の保護天然物	
笠山燔	全	小畑		石菅岩に尤もよろし	
九笠山燔	全	小畑		釣魚及び磯遊の清遊地	

(二四) 産業の萩

萩市の産業は、之を大萩の萩市から見ると、舊川内の萩から見ることで、大に其の趣きを異にする所がある。椿東、椿、山田の三村落部の大勢は矢張普通農事を眼目とするの農村部落で、山田村の木間一帯が此の外に優秀なる造林地帯であることは、萩市の一特徴であらう。

松本柿に、中津江ほうぶら(南瓜)、沖原西瓜に、山田の小木ヤア(妻木の賣り聲)は昔からの名物であったが、今でも椿東村の中津江ミ椿村の沖原ミは川内の弘法寺作園と相待つて萩市民に優良な新野菜を供給し、他地方へも之を移出して居り、山田地方は隣村の川上、明木、三見地方ミ相待つて萩市内に薪炭の供給地である。今若し萩港の輸出統計を見ると、竹材、丸太、割材等の輸出が實に巨額を占めて居るのは矢張萩港が、是等造林地方を後地として居るの恩恵である。

舊藩時代に書かれた他所問答ミいふ本を見ると、長州名物に阿武郡青葉瀬の雲丹ミいふことが出て居るが、今も山田村の玉江部落で賣り出して居る雲丹は確かに萩の滋味であり、又た名物として東京都京阪地方に賞美されて居るこゝ、朝鮮雲丹の比でない。舊藩時代彼の村田清風の奨励によりて水産加工

品さいふものが防長の名物になつて、萩の鯖の鹽から（鯖の臟腑の塩漬）が有名であつたが、今では餘りそれを拵えぬのを遺憾とする。それでも矢張或意味に於て萩は水産都市としての誇りを持ち、今後もう少しは水産都市として名聲を發揮するやうに萩當局と關係業者との發憤を要しはしないであらうか。兎も角も萩市は玉江、鶴江、越ヶ濱さいふ遠洋漁業にまで評判の大漁業部落を持つて居つて、廳では萩市に編入さるるのが自然の形勢であるさいふ六島村の漁獲物も萩市場に参加し來つて居るか萩魚市場の競賣高が年額約六十萬圓、越ヶ濱魚市場は三十萬圓、玉江魚市場が十萬幾千圓、合計百萬圓を出入する賣り上げ成績を示して居る所に何か水産中心の計畫が無くて濟むものであらうか。然るに此の方面の發展を計畫して將來の幾百萬圓の賣上高に達すべき萩魚市場の大發展を期するの策が未だ萩魚市場に行はれて居らず、阿武大津の漁獲物を多くは他に逸するのと、未だ萩に水産品の大加工場の計畫なきは、確かに偉人村田清風を地下に泣かしめる状態にあるを考へる。惟ふに萩の沖の見島を去ること約二十里の沖に流るる對島海流は極る豊富の魚族を日本海に連れ込んでこれがために、萩地方に於ては全く他の地方に見ることを得ざる鯛の捕獲も年中之を見ることが得られるのである。天與の水産都市として將來の萩は更に大發展をなすべく、人士の發憤を要する。或は水産博物館の設

ども大に必要であらう。それにしても遊覽の客は、暫く理屈を度外にして、春は名物の雲丹、夏は阿武川の鮎の風味、秋は鮑の酢料理に冬は見島小鯛の煮附物を是非味つて御歸り下されねばならぬ。彼の他所問答の萩名物に御國鰯、萩焼物、籐細工といふことがある。これに他の古記録には萩の鱧鮓、萩の鹿子絞さいふ織物まであるが、遺憾ながら時代の變遷に連れて、焼物以外に他は凡て今日の萩に之を産して居らぬ。之に代りて萩工業品の何物が萩に出づるかを語り得る多くの材料を持たぬのが確かに萩市現代としての大缺陷である。彼の清純の阿武の河水、人情敦厚の萩の勞力、之を如何にして萩に新工業の工場運轉が出来ぬであらうか。是はさうしても萩資本家の一大覺醒を得て、大に他の資本家を招き來り、共同提携して大工業都市の萩を現出せらるべき責任があると考へる。暫くこれは後日の問題に附して、著者は名物の萩蜜柑に對して案内の勞を取るであらう。抑も萩の夏蜜柑は淵源極めて古く、大津郡の青海島の大日比からその種を輸入したさいふこともあるが、未だ以て地方の一大産物たるを得るに足らず、以て有閑人士の一話柄となつたに過ぎない。之をして萩の大産物たらしめらるるに至らしめ給うたのは、仰ぐに尊き我が 明治天皇陛下の大御心に出發するといふことを我も人も決して忘れてはいけない。

何と言つても萩人士は明治初年の頃までは夏蜜柑の摘果期が春夏の交にあることを知らず、他の柑橘も同様に冬に於て之を味つて見て酸味舌を刺すのに閉口して、食はれぬものとなし、青少年の蹴鞠代用物に之を用ひしめて居つた。明治七年夏萩川島の勝津家に佛事があつて、果物に乏しい折柄といふので餘儀なく庭の老樹より夏蜜柑數顆を摘み來つて、佛前に供へられた。佛事終つて試に夏蜜柑の味を試みられるこゝ、これは又た意外に美味言ふべからざるものかある。驚いて俄にその三十顆を摘み之を東京の兵部大輔山縣有朋に贈られた。有朋卿の養子は勝津家の男伊三郎であつたからである。山縣卿之を味ひて之を美しなし、畏くも明治天皇に献上しられた。此の時に陛下の御一言が實に尊いことである。

「これは國産にして宜しいものである。氣をつけて栽培せよ」

こいふ御言葉の下に紅白二匹の練絹を勝津家に下賜し遊ばしたものである。

勝津家では恐惶して之を附近の林伏鹿に語つた。林伏鹿は立派な萩の藩士である。兼ねて盆栽趣味を持つ人であつた。感奮して、夏蜜柑の苗木を作つて之を廣めようといふこゝに議か一決して、枳穀きこくを臺木にして、林翁か盛に苗木を作つて、栽培宣傳を試み、小幡高政か特に廣潤の土地に産業的夏蜜柑園

を河添に設けるといふやうなことが大に萩に夏蜜柑栽培熱を高めて、萩は三百年間の城下町から一轉して、夏蜜柑の産地に轉向し得るに至つた。時恰も明治十數年の頃が主として今の萩の夏蜜柑樹の栽培された時である。

今日豊産の時に萩蜜柑の收穫は年額約四十萬圓である。これに竹籠、製繩等の副業も起つて來る。今や果粒以外に、橙皮を以て製したる、萩の薫り、或は橙顆を菊切りにしての面白い蜜柑菓子も、菓子商の手で製出せられて萩土産の名物となつて居る所に誠に 明治天皇聖徳の有り難味、假初にも國を思はせ給ふ聖慮の惶こさが思ひ偲ばるるではないか。

明治十八年夏 明治天皇陛下山口縣に行幸して山口に駐驛し給ふた七月三十日の夕景のことである。行在所の毛利家の野田御殿に於て、

「萩の夏蜜柑は如何に致したか」。

この聖旨であつた。折柄萩より献上の夏蜜柑があつたので直ちに之を天覽に供すると、龍顔莞爾として、餘程の御喜悅であつたといふことである。萩市は何處までも先づ第一に聖恩に感謝せねばならぬと思ふ。近頃萩人士中に蜜蜂の飼養が行はれて居る。夏蜜柑の醇芳を吸ひての蜂蜜であるから、そ

の芳香薬味天下第一を以て聞えて居る。

匂ひゆかしく香もなつかしく

色も黄金の夏蜜柑 (野口雨情)

山口縣農事試験場では堀内に柑橘栽培地を設けて、夏蜜柑の栽培指南を行つて居り、東出町の吉村風月堂主人は夏蜜柑マーレードの製作に苦心成功して、今や其の工場は保稅工場の取扱ひを受け、製品は遠く歐州にまで勇飛して珍重されて居る。

今一つの有力な家庭工業品は北古萩地方の履物製造であらう、高杉晋作の奇兵隊下駄の製作から一轉して今では年額三十萬圓の履物を製造して大阪に上せ、大阪物といふレッテルの下に諸方に賣れて居るが實は、萩市の産物である。

終に特筆すべきは名物の萩蒲鉾である。萩蒲鉾は他の地方の簀巻蒸しと違つて、板付式の焼貫き製であるから、其のまま切つて之を味つても、更に生臭いこもなく、精製品は盛夏の頃でも一ヶ月は大丈夫腐敗する恐れが無いので、舊藩時代に之を江戸へ送つて天下の名物といふ名を博し、こんなものがさうして海を泳ぐかと問うた江戸兒も居るこいふやうな滑稽談まである。

何處かの大名が萩蒲鉾に勝たうと思つて、鯛の目の周りの肉で蒲鉾を作らせ、長州侯を招いて馳走しられた。成程是は甘い。流石の長州侯も口惜しかつた。歸邸後直ちに命じて鯛の目の周りの肉と同様な味を持つ魚類は居らぬか。國へ申し遣はして調べて見よとの御言葉であつた。

萩に於ては御用蒲鉾の製造人が、濱崎新丁の中の丁に數戸居つた。藩府の命によりて、濱崎魚市場に集まる各種の魚族に就きて之を調べて見ると、エツ魚の肉を以て作つた蒲鉾の味が鯛の目の周りの肉で作つた蒲鉾以上の味を持つといふこゝが知れたので、盛に之を製造せしめられるこゝになつた。幸にエツは濱崎魚市場に賣さるる安價の魚で、相應に漁獲高もあるので好都合であつた。

爾來萩蒲鉾は魚味製法とに於て天下無類の名物とあり、就中新丁蒲鉾が本場であつた。明治維新後に新丁の蒲鉾業者が仙崎、三田尻、宇部、下關等に赴いて製造を始め、又た其の法を其の地に傳へたので、今では其れ等の地の産が往々、本場の萩をも凌がうとするの勢がある。

併し何と言つても萩の魚味が格別のものであるから、矢張萩が本場たることに搖ぎはないのである。其のまま小口切りの料理以外に之を賽の目に切つて、澄し汁の霰吸物なごは實に高雅なものである。或はこの汁の實専門に拵えた蜂の子こいふものもあり、山芋をすり交ぜて拵えたハンペンハンペンを浮べての

澄し汁などは到底萩以外の地に於て之を味ひ得ぬものであらう。

要するに今日の萩蒲鉾は内地は京阪は愚か東京、函館へ、外へは朝鮮、滿洲への節期の進物として盛に送り出されて、萩名物たるの名聲を發揮して居る。若し夫れ遊覧客の手土産品としても誠に手輕で清新第一なるは萩蒲鉾であらう。今日萩に於ての蒲鉾製造業者は各町内に相應に多くあるのである。

### (一五) 遊覽期と萩土産

萩は四季何れの時も遊覽に適して居るが、一番の好期は春であらう。先づ堀内指月公園の櫻花は爛漫として古城山下に客を招き、紅唇半ば綻ぶるの三月の末頃から、落花繽紛として盞中に浮ぶの四月下旬に至るまで、約一ヶ月の萩は實に花の都で、其の中心地たる指月公園の外に、春日神苑の櫻花、川島堤の櫻花、南明寺の糸櫻等が之を助けて居る。指月公園は坐して見るに適し、川島堤は歩いて見るに適し、南明寺は、糸櫻もありはするが、觀音堂に登臨して、近くは川島堤から、遠くは城山の櫻を見渡すに、言ひ知れぬ雅趣がある。靈椿山大照院附屬の嶽山の觀音さいつて、前にも言つた行基作の國寶赤童子を持つて居る嶽觀音堂からは、又た河添堤の櫻花も眺められて、矢張春に於ける萩の一勝

區である。

長門峽の阜月の躑躅花を見て阿武川を下つて萩に入れば萩は指月公園の城濠に於ける燕子の花の盛りである、公園は葉櫻の蔭徐ろに涼しく、城山の新緑と相待つて實に俗界の何處にあるかを知らぬ。

夏的美禰郡秋芳洞と、大津郡青海島を觀る人、萩に來つて、菊ヶ濱の涼風に日中の熱氣を一掃し、橋本川の夜涼みに川魚料理の味を占めねば遊覽は物足らぬことであらう。更に翌日山陰線よりの車中の一客となつて須佐灣の景勝に觸れられんことをお勧めする。

萩の秋は長門峽の紅葉を材料に入れつゝ、靜かに市の内外に豊富なる維新史蹟の探求に最適の時期である。指月神社、椿八幡宮、松陰神社等の秋祭りが凡てこの期を以て行はれて居る。松陰神社の春祭は松陰江戸に檻送しられて萩を出づるの日即ち安政六年の五月二十五日に因んで五月二十五日を祭日となし、秋は松陰刑死の六年十月二十七日を陽歷に換算して十一月二十一日を以て例祭日として居る。風檐書を繕いて讀めば古道顔色を照し、歩を古人の史跡に運べば七生民間に生まれて國賊を滅ぼすの靈は莞爾として、出でて我を迎ふるものがあるは此の時である。

冬の萩は何と言つても何處も同様に來客の寡少な時期であらう、されど雪の銀世界以外に於て北海魚

の鮮味を杯盤に上せて、低誦微吟しつゝ、客窓に新年を迎ふるの趣味は恐らくは萩が第一であらう。若し夫れ新堀の四季の花、浮島の浮草ならぬ夜の手枕の夢に至つては著者の案内以外に於て別に粹人の案内があるであらう。

萩言葉は阿行多行の使ひ別けが混雜して居る所に無邪氣な笑話柄が少くない。湯ぞうふ(豆腐)にざい(酢)橙酢)。それかと思ふに今度はすつかり多行にまぎれ込んで、あれ(吾)、あたくし(私)、あた(綿)にあらじ(草鞋)、何もかもあづくめの餘談を引いて。あいうえおの、おらが首相の田中大臣も有名なものであつた。

萩料理には高荳葉の酢味噌での生料理、他所の人はビックリするであらうが、併し滋味此の上もない。名物のお萩餅、何時拵えたか隣知らずの音無し餅の御馳走の本場はまた萩である。春菊をローマ(羅馬)と呼んで輸入の昔を偲ばしめ、昔は長崎以外に見られなかつた。支那の豚の角煮料理を今も萩の料亭に見るが如きは、長州様が日本攘夷の本場と思ひきや、何ぞ圖らん、西洋文明を取り込みの急先鋒であつて、早くから臣従を長崎に遣はして、逸早く天下に先つて新文明を取り入れられたといふ記念を今に傳へ遺して居るの一端であるのも面白い。

松本焼に加ふるに今では萩人形の銘を打つて、松陰人形、農人形、竹細工人形などが、店に並んで客を迎へる。松陰が饅頭煎餅に入つて、羊羹に蜜柑の風味を交へたものもお土産に數々出来るやうになつた。

春の若布や紫海苔の風味、初夏の白魚、萩食堂に於て晝辨當の一杯吸物にも決して悪くはないと序に之を御紹介して置く。

### ○萩名物の歌

香川 幸舍

御客さま、抑も萩の名物は、長州武士に萩女。大江の流れ彌深く、契る心は一筋に皇御國のため  
にきて、家も屋敷も何のその、明治維新と諸共に打つて替りし蜜柑畑。さすがゆかしき花の香に、  
實る蜜柑の小口切り。菊の模様も見えます。此處はゆかりをたすね來て、指月の春の櫻狩、先  
づ御馳走の親御には隣知らずのお萩餅、縁につながる從兄弟煮や、中に交れる名物の萩蒲餅に半輪  
の朧月夜のかげあるを、偕も情けの風月堂。お國自慢をお土産と、賣る罐詰も愛でしやんせ。一  
夜を明かす宿とても、情けの馳走濃やかに、ぬるりやくるり初もつく、げに北海の珍味かな。斯  
うよよ〜こ明け鳥誘ふにつけて行く人を、先づ松本の一めぐり次は何處も問ふ言の、葉草はしば



し待ちやんせこ、片手に朝茶、片手にはあの名物のお焼き餅、宿の手弱女にくからず。見目より心嬉しきは蓬が草の焼風味。千代の齡も延びますよ。夏によろしき菊ヶ濱、住吉の宮、住の江のまつ甲斐ありて夏まつり。團扇片手に手をこりて共に詣づる悦びやあほぐ神風いこ涼し。濱邊傳ひて越ヶ濱、汲む水道の水にさへ、心をこめて尋ねれば、皆懐しの物語。旅路の友の秋の月、うち見る萩の名所には弘法島の松の月、観音院の水の月、茶風爐に起る松風の音に聞ゆる光國のそのお茶菓子は萩の月。冬の御馳走第一は、豚の角煮に南蠻煮、長崎よかばい直傳のゆかりを流石残せばや、今も名物萩の味、花のお江戸の庖丁も萩には譲る甘味をば、鯛や方頭魚や名物の鰯の刺身にきこしめせ。次は飲む酒、ねむる味。夢は靜かに年の夜や、浪のりふねの寶舟。お土産たんに買ひ集め積んでお歸り、萩港より。

○萩旅行新風味

香川幸舍

春

櫻花大和こゝろに匂ひつゝ、

東亞細亞の春心地かな。

夏

萩の水、ロンドン川に通ふなり、

いざや世界を旅路ともせん。

秋

空高く馬は肥えたる秋の日に、

乗り出す萩の旅衣かも。

冬

來る人を萩に迎ふる冬の夜の、

ねんこ初春、いざ起き上れ。

萩新案内(終)

萩年表

紀元	年號	皇室	藩主	記事
二二二一三	天文二二	後奈良天皇	隆元就	十月朔日嚴島ノ合戰
二二二二〇	永祿三	正親町天皇	全輝元	御即位料進獻
二二二六〇	慶長五	後陽成天皇	全輝元	九月十五日關ヶ原ノ戰
全	全	全	全	十月十日防長二州受領
二二二六一	慶長六	全	全	三月十八日萩築城歛始メ
二二二六四	慶長九	全	全	十一月十一日萩牙城成リ輝元入城
二二二七五	元和元	後水尾天皇	全	萩城全ク成ル
二二二八七	寬永四	全	全	輝元公菩提寺トシテ天樹院建ツ
二二二一〇	慶安三	後光明天皇	全	防長二州ヲ十八宰判ニ分チ代官ヲ置ク
二二二一四	承應三	御西院天皇	綱廣	大照院ヲ建テ、菩提寺トス

事

二五二四	全	二五二三	全	二五一九	全	二五〇九	全	二五〇三	全	二四七六	全	二四三〇	全	二四二二	全	二三七九	全	二三五一	全	一二一五	全	
元治元	全	文久三	全	安政六	全	嘉永二	全	天保一四	全	文化一三	全	明和七	全	寶曆二	全	享保四	全	元祿四	全	明曆元	全	
全	全	全	全	全	全	光明天皇	全	仁孝天皇	全	光格天皇	全	後桃園天皇	全	後櫻町天皇	全	中御門天皇	全	東山天皇	全	五	全	
全	全	全	全	全	全	全	全	敬親	全	齊	全	全	重就	全	吉元	全	吉就	全	全	全	全	
七月十九日京都變動	十月十一日但馬生野義舉	八月十八日朝議一變	十月二十七日吉田松陰刑死ス	八月二十一日戊午密勅降下ス	三月二日新明倫館開校式	四月一日村田清風ノ建議ニヨリ羽賀臺大閱兵	十二月十一日香川津二孝子凍死ス	十二月十一日香川津二孝子凍死ス	四月一日村田清風ノ建議ニヨリ羽賀臺大閱兵	祖靈社ニ神號ヲ仰德大明神ト賜フ	城山ノ西南麓ニ祖靈社ヲ建ツ	四月十二日藩學明倫館開校式	東光寺ヲ建テ、菩提寺トス	濱崎住吉神社造立	濱崎住吉神社造立	濱崎住吉神社造立	濱崎住吉神社造立	濱崎住吉神社造立	濱崎住吉神社造立	濱崎住吉神社造立	濱崎住吉神社造立	濱崎住吉神社造立

全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	
二五二七	全	二五二六	全	全	全	全	全	二五二五	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	
慶應三	全	慶應二	全	全	全	全	全	慶應元	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	
全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	
全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	
二月十三日藩公山口ニ永住令	正月九日明治天皇踐祚ス	九月朔日休戰令	六月七日長幕兩軍開戰	四月十三日幕府再び征長下令	二月二十二日藩論統一	正月六日繪堂内訌戰始マル	正月四日幕軍師ヲ班ス	正月二日高杉晋作下關ニ舉兵	十二月十九日七政務員ヲ刑ス	十一月十二日四政務員ニ死ヲ賜フ	十一月十一日、十二日三大夫ニ死ヲ賜フ	八月一日征長幕令	八月一日征長幕令	八月一日征長幕令	八月一日征長幕令	八月一日征長幕令	八月一日征長幕令	八月一日征長幕令	八月一日征長幕令	八月一日征長幕令	八月一日征長幕令	八月一日征長幕令

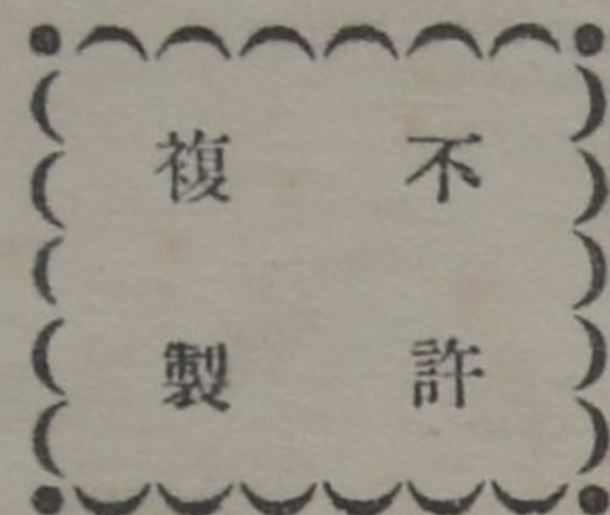


録目書圖行發院書英含

著者	書名	概要	要	定價	送料
香川政一先生著	松陰逸話	松陰の逸話を中心として略傳を趣味的に記したるもの		一五	二
香川政一先生著	吉田松陰	松陰逸話の姉妹篇にて本書は傳記を主とするも前書に載せざる逸話を併せ載せ凡て材料は重複せず		一五	二
香川政一先生著	高杉晋作小傳	晋作は幕末に於ける一流の人物にて維新の大業に大關係あること既に世の知る所である本書は其一代の事蹟を尤も正確且趣味的に叙述し特に書中晋作の面目躍々たるものなれば家庭及青年に絶好の物讀		三〇	二
含英書院	最新萩市街案内圖	市街及名勝舊蹟を最も親切に細大もらさず美術印刷したる最新刊		一五	二
萩中學校校友會	松陰神社溫故錄	神社の來歴村塾の現狀並に先生の遺墨にて社寶となれるものの解説		一五	二
山本勉彌	防長ニ於ケル郡司一族ノ業績	郡司家の先は砲術家なりしが毛利家に仕へて世に鎗砲鑄造等の事に任じ極めて多くの功績がある本書は其の家系及業績につき詳細なる新研究を發表せるもの		三〇	二
吉田初三郎	萩名所圖繪	萩を中心として附近の名勝を畫かれたる圖繪に親切なる案内文を添えたるもの		一〇	二
吉田初三郎	長門峽鳥瞰圖	名勝長門峽の實景を目前に見るが如く遊覽には特に必携のもの		一〇	二

昭和十一年三月十五日印刷  
昭和十一年三月二十日發行

(定價貳拾五錢)



著者 香川政一  
 發行所 山口縣萩市濱崎新丁第七十一番地 藤川東輔  
 山口縣萩市西田町第五一番地  
 發行所 含英書院  
 山口縣萩市堀内第二〇〇番地ノ三 野村盛一  
 印刷者 山口縣萩市瓦町七十三番地 株式會社 萩響海館  
 印刷所



萩市立萩図書館



111625380

